

やはりあざとい後輩とひねくれた先輩の青春ラブコメはまちがっている。

鈴一風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼の中学生生活は暗黒だった。その黒くくすんだ青春を変えるために、彼は努力を重ね、総武高校に進学する。

しかし、人はそう簡単には変われない。彼は初日から選択を失敗し、彼の高校生活は最悪の幕開けとなる。

入院先の病院で出会ったあざとい少女、一色いろは。

ひねくれ、大人びた雰囲気の少年、比企谷八幡。

現実と向き合い、傷つき、間違え、彼らは何を求めるのか。

これは、「本物」を探し続けるあざとい後輩とひねくれた先輩の間違いだらけの青春記録である。

繰り返し言おう。

この物語は、間違いだらけである、と。

※作者はまごうことなき葉山アンチです。この作品では葉山が結構キツイ目に合いますので、苦手な人はご遠慮ください。

目 次

病院編

第一話 比企谷八幡の青春は変わらず、されど変化の兆しを見せる。

第二話 一色いろはは模索し、歪な闇の中に光を見る。 | | 8

第三話 光の元に闇は生まれ、闇は、静かに光の糧となる。

17

第四話 そして、比企谷八幡は自ら闇に歩き出す。 | |

第五話 二つの繋がりは壊れ、やがて新たな繋がりを結ぶ。

41

第六話 救われた彼女は、変わるために決意する。 | |

第七話 そして、強い想いを残しつつ、二人はそれぞれの世界へ歩き出す。

キャラ設定 病院編

それぞれの日常編

第八話 漸く始まつた高校生活は、されど変わらず。 | |

第九話 リスタートした中学生活は、中々悪くない。 | |

第十話 騒がしい彼女との時間も、まあ悪くない。 | |

第十一話 アットホームな我が家にて、先輩と後輩は再び邂逅する。

112

103

89

79

75

61

50

25

1

第一話 比企谷八幡の青春は変わらず、されど変化の兆しを見せる。

突然ではあるが、俺——比企谷八幡ひきがやはちまんの中学生活は暗黒だった。ろくな話す相手もおらず、それほど仲の良くないクラスメートの唐突な話に適当に相槌をうち、女子の何気無い仕草に幾度となく勘違いを繰り返した。一体、この三年間でどれだけの黒歴史が刻まれたのだろう。……やばい、思い出したくない。思い出したらただでさえ不人気な目から水が溢れだしそう。

俺の顔の中で唯一の不人気、目。周りの奴らからは「腐つてる」とさえ言われるほど酷いらしい。この目さえなれば整つた好青年だと自負できるのだが。愛しい愛しい妹、小町に言わせれば、「目さえまともなら見られるレベル」。あれ、目がまともでも駄目じやね？

と、まあ長々と愚痴を垂れ流していたわけだが。なんだかんだ言っても俺もまだまだ夢見たい中学生。中学は無理だつたが高校こそは！と思うわけですよ。で、頑張つた。超頑張つたね、俺。苦手だった数学を含め猛勉強の末に、同じ中学から誰も進学しない千葉市立総武高等学校を受験し、見事合格した。これで俺の過去を知るものは高校にいない。つまり、高校からは「友達のいる明るい俺」という人物像を一から作り上げることができる。所謂、「高校デビュー」というやつだ。

人間関係なんものは環境の変化で簡単にリセットできる。だから、俺は性に合わない努力を重ね、その環境の変化に懸けた。少しほまともに青春つてやつを楽しめる高校生活が訪れる信じて——

——いた時期もありましたよ、俺にも。どうやら、人は簡単には変われないらしい。

あれは、待ちに待つた総武高校入学式。俺は最初の印象が大事だと思い、式が始まる二時間前に家を出た。一番乗りでクラスに行けば、少なくとも二番目に来た奴は俺に声をかける。つまり、その時点で「クラスメートに認識される」という第一関門は越えることができると考えたからだ。因みに、俺の作戦をお袋と愛しの小町に話すと、同情の眼差しで泣かれた。解せぬ。

とまあ、そんなこんなで家を出た俺は新品の自転車を走らせて学校へ向かっていた。このままだと教室で一眠りできるまである……などと考えていた頃だつただろうか、反対側の歩道を、犬を連れた女の子が走っていた。いや、どちらかというと犬に引っ張られている感じだつたか。危なつかしい感じがして目を離せなくなり、暫く目で追つていたのだが……

急に、犬のリードが切れた。そして、そのまま犬は、女の子を置き去りにしたまま俺の方に走ってくる。おいおい、道路に出たら危ないだろ……とか考えてた正にその時。

対向車線からけたたましいクラクションを鳴らしながら、黒塗りの車が走ってきた。

そこからはよく覚えてない。覚えているのは、自転車を捨てて車道に飛び込む感覚と、全身を駆け巡る鈍い痛みにやたら吠える犬の鳴き声。

まあ、つまりだ。

俺は入学式当日に、犬を庇つて車に轢かれたわけだ。薄れゆく意識の中で、俺は問わずにはいられなかつた。

これ、何てアニメ展開？

なんてことがあって、俺は入院。命に別状は無いらしいが、足を中心で打撲や骨折、全治一ヶ月だと言わされた。小町には泣かれ、お袋には罵倒された。「無茶するな」と。それもまあ大変だつたが、俺はぼんやりと学校のことを考えていた。俺は初日からこの有り様。たとえ俺がいなくとも学校の時間は進む。元より、俺という歯車は既に学校という枠組みからはみ出しているまである。学生復帰は五月から、既に仲良しグループは出来上がっているだろう。

必然的に、高校でもぼつちが決定した瞬間だつた。

「つはあ……」

あれから一週間。やることと言えば小町に持つてきてもらつた文庫本を読み漁るだけ。今までと何も変わらない。結局、俺の性に合わん努力で分かつたことは、人は簡単には変われないということだけ。どうあつても、俺という人間は一人に縁があるようだ。このまま高校でも中学の時と同じ、ぼつちとしてひつそりと過ごしていくだけなんだろうなあ。いつそぼつちを極めるか、なんてことすら考え出した。

最強のぼつち、か。

「それもいいかもな」

真っ白い病院の個室で、誰に言うでもなく一人呟く。友達とは期待し、期待され、押し付け合つて、勝手に失望する。そんなものだと思っていた。現に、今まで友達だと思つていた奴らはみんなそうだつた。恐らく、これからも友達というものはそういうものから変わらないの

であろう。ならば、そんなものを作る意味などあるのだろうか？ただ相手の顔色を窺い、合わせるだけで本音も言えないような友達は、果たして本当に必要なものなのだろうか？恐らく、答えは否である。

取り繕わなければいけない関係など、「偽物」だ。きっとまた勝手に期待して勝手に裏切られ、勝手に傷つくのだろう。そんなものを、俺は必死に作ろうとしていたなんて、笑えてくる。今までの俺の行動は、全部裏目に出ていたわけじやないか。

笑えてきたら、楽になつた。そして、気づいた。俺は友達が欲しかったんじやないんだ、と。俺が求めていたものは、そんな薄っぺらじやない、何でも話せて何でも分かり合える。そんな——

「俺は、本物がほしかつたんだ」

「何ですか？ 本物つて」

心臓が飛び出るかと思った。いやマジで。何気無い独り言に返事が返つてくるとビックリするよね。

声がしたほうを見ると、個室の入り口に女の子が立っていた。栗色の髪の毛、大きなくくりつとした目の、まんま「美少女」が。いや、それより。

「いや、あの、な、何でここに？」

「ここは俺の個室の筈。入院の時にもそう言われた筈なんだが、部屋を間違えたのか？」

が、返ってきたのは予想外の返答だった。

「何故と言われましても…私の部屋だからとしか」

……ホワイ？え、どゆこと？

「いや、ここ俺の部屋なんだが……」

「ええーでも、こいつて205号室ですよね？」

「そうだが……」

確かにここは205号室で合っている。だが、俺の個室だというのも合つていて、彼女の個室だというのも合っている。もう何が合つてゐるのかすら分からん。

「ああ、やっぱり先に来てた」

「瀬谷さん？」

そう言つて、新しく入つてきたのは瀬谷沙也加さん。俺の担当看護師だ。

「瀬谷さん、やつぱりつてどういうことですか？」

「いやあ、一色ちゃんを部屋まで案内しようと思つて待つてもらつたらいなくなつてたからさ。先に行つちゃつてたんじゃないかつて。で、来たら案の定」

「だつて部屋の番号さえ聞けば一人で行けますし。つていうか瀬谷さん！何で男の人がいるんですか！ここ私の部屋なんですよね！」

一色、と呼ばれた女の子が瀬谷さんに抗議の異を唱えた。まあ、今のは話通りにいけば俺とこの一色つて子が相部屋つてことだもんな。流石にそんなことは——

「そうだよ？ここは一色ちゃんとそこの比企谷くんの相部屋つてこと」

——そんなことあつた。え、いやマジで？

「マジですか!? 私まだ14ですよ！中学生ですよ！男の人気が相部屋なんて危ないじゃないですか！色々と！」

中学生だったのか。俺の一つ下、いくら年が近いとはいえ、確かに男女相部屋なんて普通はあり得ん。特に思春期真っ盛りの女の子への配慮が無さすぎる。

つーか、本当のこととはいえ、もう少しオブラートに包んでもらえませんかね、一色さん。俺のハートにグサグサ来る。軽く泣きそう。「それは言つても、急な入院だから部屋が用意できなくてねえ。まあ、どーしてもつて言うなら進言しとくけど、多分ここの方がいいと思うよ？他に空いてる部屋つて、一日中愚痴りっぱなしの婆さんや偏屈爺さん位だし。それでもいい？」

「……」

一色が凍りついた。まあ、俺にさえ拒否反応示すんだし、同じ異性でしかも偏屈な爺さんなんて論外。同姓でも婆さんの愚痴は聞くに耐えられん。俺だつて一色さんとやらの立場なら御免だ。

「その点彼はいいわよお。基本本ばつか読んでるからうるさくしない

し。後、イビキも搔かないし寝顔もかわいいし」

「おいちよつと待て」

瀬谷さん? 何であなた俺の寝顔知つてるんですかね?

しかし、俺の言葉はスルーで瀬谷さんは続ける。

「それに、彼はあなたが思うようなことはしないわよ。彼、ヘタレだから」

「おいこら」

何で一色さんの説得で俺がディスられ続けてるんですかねえ……納得いかん。正論だから余計に。

「それに、本気で危なくなつたらすぐにナースコールなさい。飛んでくるから」

「俺の信用無さすぎだろ……」

瀬谷さんの場合、冗談だと分かつても遠慮無しにグサグサ来るからキツイ。後キツイ。

「んー……まあ、そう言うことなら……」

それで納得しちやつたよ、一色さん。いいのか、それで。

とか言つてたら、一色さんが俺の目の前まで歩いてきて、先程までの勢いはどこえやら、嫌々というか、渋々というか、いやはつきり嫌そうな顔で頭を下げた。

「そう言うわけで今日から相部屋になる一色いろはです。嫌々ですけどよろしくお願ひします、比企……比企……」

「比企谷な、ひきがや。まあ、よろしく」

名前を思い出そうと頑張つていたので、自分から名乗る。ついでに挨拶も返すと、下げていた頭をガバッとあげた。

「何なんですかそれ狙つてるんですかまさか自分から名前を訂正することでさりげなくアピールしてるんですか私こんな見た目なんで確かにモテるし勘違いされやすいですけど流石に会つたばかりの人とか無理ですそれ以前に目が何かアレなんで生理的に無理ですごめんなさい」

「勘違いも甚だしいわ」

早口で何て言つてたかよく分からんかったが、とりあえず何か俺が

告白して振られたっぽいこと言つてたな。いや何でだよ。

「いきなり仲いいわねー」

「よくない（です！）」

ぼっちは嘆き、ぼっちは決意し、漸く受け入れようと思つた病院ラ
イフは、呆気なく崩れ去つたようだ。

これが、俺と一色との出会い。

これが、俺の間違つた青春ラブコメの始まりだつた。

第二話　一色いろはは模索し、歪な闇の中に光を見る。

「せんぱーい、ここ教えてくださいよー」

「うるさい、俺今読書中。後せんぱい言うな。お前まだ中学生だろうが」

「年齢でいつたらせんぱいの方が上じやないですかーならせんぱいで良くないですか?」

「良くない。むず痒いから止めろ」

一色いろはと相部屋になつて一週間。勉強中の一色がうるさい。あれから何だかんだ色々あつたが、まあ流石にお互い慣れてきた。病院側も思うところがあつたのか、瀬谷さんを始め、色々な人が甲斐甲斐しく世話を焼いてくれた。そのお陰か、一色の態度も徐々に軟化してきただんだが……

「良いじやないですかーこんなに可愛い後輩に呼んでもらえるんですよ?普通なら泣いて喜びそうなものじやないですか?」

「普通なら真意を測りかねて困惑と^{さいぎしん}猜疑心で泣きたくなりそうだけどな」

今度は別の問題が浮上した。こいつ距離感が無さすぎる。最初の警戒心どこ行つた。しかも何故だか俺のことを「せんぱい」とか呼ぶようになつた。……正直ニヤけそうになるのを抑えるので精一杯なんで止めてください一色さん。そんな顔をすれば一発で軽蔑の眼差しを受けてゾクゾク身悶えしちゃうまである。いや、ゾクゾクすんのかよ。どつちみち変態じやねえか。

「とにかくせんぱいは止めろ一色。それ以外なら何でもいいから」「と、言われてもですね……」

んー、と頸に手を当てて考え出した一色はすぐにはつとした表情で後ずさりした。や、ベッドの上だからそんな後ずさつてねえけど。

「もしかしてさりげなく名前呼びを推奨してるんですかすみません下の名前呼びは特別な人だけつて決めてますのでいくらせんぱいが私

と親しくなつたからつて流石に無理です後やつぱり目が生理的にア
レなんで二重で無理ですごめんなさい」

「もう突っ込むのすら億劫おつかうだわ」

距離は変わつてもこのマシンガンお断り（俺命名）だけは変わらない。むしろ良く噛まずに言えるな。呆れを通り越して感心するまである。

「ま、結局どう呼ぶかなんて勝手にしろ。俺は読書に戻る」

「そうですかーじやあせ」

「せんぱい以外でな」

「ぶー！けちー！」

そう言つて両の頬をハムスター宜しく膨らませる。一色本人の小柄さも相まって本物の小動物みたいだな。

「はいはいあざといあざとい」

このいなし方も何度目だろうか。これはあれだな、一色は学校では「今どきJC」つて感じのトップカーストの一員だろうな。正に輝かしき光の住人。俺のような最底辺の闇住人とは大違いだ。

「もー何ですかまたあざといつてー…はつ！もしかして遠回しに可愛いとか言つてますか告白ですかすみません可愛いと言われるのはぶつちやけ嬉しいですけどできればもつとかつこいい人に言われたいし何よりせんぱい相手だとアレがアレンでやつぱり無理ですごめんなさい」

「だんだん雑になつてね？」

何だよ、アレがアレつて。

まあ、このようにどうにも女子との距離感つてやつが分からん。今のJC的にはこれが普通なんだろうか。比較できる女子の知り合いがないから考えてみても分からんが。女子との会話なんて、学校とかで提出課題の回収で「ヒキタニ君、ノート」つて言わればいい方だつたからな。あれ、これ会話じゃなくね？やだ、目から汁が……。後一色さん、あざといの意味を調べてみろ。基本良いことなんて何も言つてねえから。どつちかつてーとマイナスだから。

一旦思考を打ち切り、俺はベッドに立て掛けてある松葉杖に手をか

ける。

「せんぱいどこ行くんです？」

「売店。マツ缶買いに行くんだよ。後せんぱい止めろ」

会話してるうちに喉が乾いてしまった。なので、千葉のソウルドリンクことマツ缶を買いに行くのだ。え？ そんなこと思つてるのは俺だけだつて？ ハハハ、ソンナマサカ。

杖を使い立ち上がると、何故か同じく一色が隣に立っていた。

「え、何？ お前もどつか行くの？」

「せんぱいについていくんですよー」

勉強中じやなかつたつけ、こいつ。それともこいつも何か買いたいものもあるんだろうか？ 特に断る理由も無いから別にいいんだが。

「じゃ、行くか」

「はーい」

隣に一色が並んで歩く。その様子は、ずっと前から知つていたような安心感があつた。近すぎるとか言つたが、俺は何だかんだこの距離感が意外と氣に入つてるのかも知れない。

「せんぱい遅いですよー」

「松葉杖患者になんと無慈悲な

……意外と、だけどな。

「やあ、いろはちゃん」

「……あー、お久し振りです」

売店でマツ缶と紅茶（一色に買わされた）を買って部屋に戻る途中、ロビーで制服姿の男が声をかけてきた。正しくは俺にじやなく、一色にだが。さっぱりとした黒髪にすらっと伸びた長身。誰がどう見ても「イケメン」という部類に属するやつだろう。まさしく、一色のようなトップカーストが好みそうな。

だというのに、対照的に一色はあまり浮かない顔をしている。むしろ顔色が悪いまである。

「一色、こいつは？」

「あ、せんぱいのこと忘れてました」

「ちよ、酷くね？」

「こちら、同じクラスの大場^{おおば}大成^{たいせい}君。で、こっちは比企谷八幡先輩。いつこ上の先輩で、相部屋のお相手です」

「うす」

「……ええ、よろしくお願ひします、比企谷先輩」

ぞくり、と。彼の声を聞いた瞬間、背中に冷水でもぶつかれたような寒気を感じた。：：何だ、この感覚は。

「…それと、いろはちゃん。さつき相部屋がどうとかって言つてたけど…」

「…ああ、この人が私のルームメイトなんですよー」

「ルームメイト…つて、何で君たち二人が？仮にも男女なんだし、万が一を警戒すれば…というか君は」

「あー大丈夫ですー！この人、結構ヘタレなんで！そーいうことは何もないし、する度胸もない人なんで心配ないです！」

「おい」

何故急に俺がデイスられなきやならんのか。

「それに、病院側にも色々あつたみたいだしー、別に私は文句ないんですけど。いいんですよーこのままでも」

嘘つけ、最初の方は結構文句垂れてたじやねえか。まあ、言わんけど。

「……まあ、それならいいか。それより、一刻も早くいろはちゃんが学校に戻つてこれるよう影ながら祈つてるよ。リハビリ、頑張つて」

「……はい、ありがとうございます」

「今日は時間とれなかつたからこれで失礼するけど、また日を改めてお見舞いにーー」

「や、大丈夫です！そんな大したことじゃないんで！本当！」

「そう、かい？分かつた。ごめんね、じゃあ」

最後に手を軽く振つて、大場という男は去つていった。

……さて。

「……もう大丈夫か、一色」

「……やつぱり、気づいてました？」

「まあ、そんなあからさまに服の端っこ掴まれたらな」

そう、一色はさつきの話の時から、小さく俺の服の端を掴んでいた。そして、ぎゅっと握つた手は、体は、小刻みに震えていた。ただのクラスマートと言うのなら、会話しただけでこんな状態にはならないだろう。顔色も、さつきより酷くなつていてるようだ。

「……とりあえず、部屋に戻るか」

とりあえず、ここから早く移動した方がいい。何か訳がありそうだしな。

「……せんぱい、遅いです」

「無茶言わんでくれ」

手を離してくれたらまともに歩ける、とは流石に言えなかつた。

「ほれ、紅茶」

「ありがとうございます……」

互いにベッドに腰掛け、向かい合う形で座る。紅茶を渡しても、一色の表情は晴れない。さつき売店で泣き真似してまで俺に奢らせたあの勢いはどこへやら、だ。

とりあえず、マツ缶のプルタブをあける。プシュッと小気味よい音を立てたマツ缶をおもむろに煽る。やはりこの暴力的な甘さがいい。苦々しい現実を洗い流してくれる。俺につられたのか、一色も紅茶のボトルをあけて、口をつける。

「美味しいです……」

じやあ何で買つたんだよ。雰囲気的に言わんけど。まあ、飲まんなら後で処理しておこう。瀬谷さんが。
……さて、と。

「その、一色。良かつたら話してみないか？何があつたのか」

良かつたら話してみないか？だとさ。あの面倒臭がりな俺が。友情なんてない、ぼつち最強なんて宣のたまつてた俺が。自分でも何言つてんだつて思うよ。

「嫌です」

しかもバツサリ断られたよ。

「そんな義務感に駆られたから聞く、みたいなこと言われても話したくないです」

そう言つて、一色はくるりと体ごと顔を背けてしまった。
義務感、か。そんなの……

「俺が嫌いな『偽物』そのものじゃねーか……」

やつぱり俺はまだ未熟だ。孤高のぼつちを目指す、なんてアホみたいなこと言いながらもまだまだ生温い「偽物」にすがろうとして

いた。

正直、俺は自分さえ良ければ他人がどうなろうがどうだつていい。他人のために何かするのすら面倒だ。

だが、なんというか。

目の前にいるこの少女だけは、放つておきたくなかった。

「……じゃあこう言い変えよう。義務感なんかじやない。俺は、俺のためにお前に何があつたのか聞きたい」「……どういう意味ですか？」

「言つた通りの意味だ。俺はお前のこと何も知らん。よくよく考えればお前が何で入院してゐるのかすら知らねえわ。：つまりだな、知らないってことは想像しかできねえし、どうやつたつて手探り状態になつちまう。そんな状態で義務的になるなつて言う方が無茶だ。だから俺はお前のことを知りたい。知つた上で、もし下らないことなら笑つてやるし、何なら罵倒だつてしてやるよ。俺は、『義務的』になつても『同情』はしない」

顔の見えない一色に、持ちうる語録をフル活用して話続ける。多分、俺は思い出しているんだ。過去の俺を。勝手に俺のことを知つた気になつて、勝手に行動して、勝手に失望して、自分勝手に心を踏み荒らされた、過去の俺自身を。俺と一色は違う。故に、状況が同じだなんて思わないが、人間関係の「闇」を嫌というほど味わつた俺だからこそ、理解できることがあるかもしれない。「同情とは、時として否定よりも強い毒である」。そんな言葉を聞いたことがある。俺はさつき正に、一色の傷口に無意識に毒を塗り込もうとしていたんだ。

だから、今の一色に必要なのは、甘い言葉や態度なんかじやない。「それに、お前の調子が悪いと、ひいては瀬谷さん達に俺が怒られるまである。それにだ」

今まで甘い欲望に裏切られ、嘲笑われ、蹂躪され続け、歪んでしまつた最底辺の俺でも一色にできること。

「今まで何回言つても止めなかつただろ、『せんぱい』呼び。だつたら、こんな時ぐらいせんぱいに頼れ、あざとい後輩の一色さんよ」

一色が最底辺に墜ちたなら、歪んでしまうと言ふのなら、俺の最低

な過去を総動員しても、こいつを最底辺から引っ張り出す。光の届く表参道に放り出してやる。

それが、ひねくれた最底辺の「せんぱい^お」にできる最大限の手だ。

「……ずるいです、その言い方」

「ひねくれてるからな、お前のせんぱいとやらは」

「人たらしですか、最低です」

「自覚してるよ」

「つふふ……」

一色が笑った。顔は見えないが、こんな俺でも、確かに一色を笑わせることができると分かった。何だよ、最底辺の住人でも、できることはあんじやねえか。

少しの間、一色の笑い声だけが聞こえ、ゆっくりと一色が振り向いた。

その顔は、まごうことなきいつもの一色いろはの、あざとい笑顔だつた。

「ありがとうございます、せんぱい」

「礼を言われるようなことはしてないけどな」

「ひねくれてますねえ。か・わ・い・い後輩のお礼くらい素直に受けとればいいのに」

「ひねくれてるのがアイデンティティーまであるからな、俺は」

「つふふ……」

「つはは……」

そして、今度は笑い合う。そして。

「それじゃ、ひねくれてる比企谷先輩。……話、聞いてもらえますか？」

そう告げる一色の目には、確かな覚悟があつて。

「……私、虐められてたんですね
自らの過去を、語り出した。

第三話 光の元に闇は生まれ、闇は、静かに光の糧となる。

『……私、虐められてたんです』

その言葉を皮切りに、一色は自分のことを語り出した。俺はと/or>うと、ただ黙つて耳を傾ける。

「最初は普通の中学生生活だつたんです。適当に友達に合わせて、適当に男子と絡んで、適当に授業聞いて勉強して。それでも、そこそこ幸せだつたんです。楽しかつたんです。……中二の夏までは」

一色は言葉を切ると、真つ直ぐに俺の方を見る。

「中二の六月……でしたかね、彼が転校してきました。さつきの、大場くんが」

「あいつか……」

これで、一色のあの様子があいつ絡みだつてことが確定したわけだ。

「で、七月になつて……夏休みがあるじゃないですか。夏休みに入つても、クラスメートと集まること自体は結構あつて、そこに、大場くんも入つたんです。ごく、自然に」

まあ、見た目はイケメンぽいから男女両方ウケはいいだろうし、取り入り方も上手かつたんだろうな。

「それは別に良かつたんです。どうせ適当に合わせてただけだつたんで。……彼、頭も良くてスポーツもできて、あつという間にクラスに馴染んで、リーダーシップも取り始めました」

クラスで瞬く間に人気者の転校生、か。まあ、口数少ないよりは取つつきやすいだろうし、分からんでもない。

「それで、その、私ですね……彼に告白されたんです。夏休みに、皆の前で」

……なんとまあ大胆なことで。リア充怖いもん無しか。

「ぶつちやけ私可愛い自覚ありますし、まあまあコクられることも多かつたんで、慣れてたんですよ。ああ、この人もかーつて。ぶつちや

けただカツコいいだけなんで別段好意も興味もなかつたんですよ。でも、皆の前でコクられたりとか、断りにくいやないですか？だから、OK出すしかなくて、なし崩し的に付き合うことになつたんですよ」

成る程、クラスに溶け込んでいればいるほど、その繋がりは深くなつていく。特に一色は覇廻目を抜いても可愛い部類ではあると言える。そんな相手が、同じくクラスの人気者の告白をクラスメートの前で断るのは確かにキツそうだな。多少なりとも角がたつ。

そこで、ふと気になつたことが口に出る。

「……なあ、ちょっとといいか？そこで告白を断つたとかなら虐めも分からんでもないが、嫌々とはいえ受けたんだろ？ならなんで虐めに繋がるんだ？」

「……せんぱい、本当に恋愛とかに疎いんですね」

「話す相手も恋愛する相手もいなかつたからな」

「ふふ……まあ、簡単な話ですよ。端から見たら人気者同士のお似合いカップルだとしても、認めるのと納得するのは別つてことです。せんぱい、誰かいいなあつて思う女の子とかいないですか？アイドルとか」

「気になる女性か。アイドルに興味はねえし……うーむ。

「ドキプリの菱川〇花」

「なんでアニメキャラなんですか……まあいいです。じゃあその子が、イケメンの男の子と仲良さげに歩いてたら、あわよくば付き合つてたとしたらどう思います？」

「どう思うもなにも、んなもん男の方を……あ。

「同性に敵意を向ける……成る程、嫉妬か」

「そーいうことです。特に女子の嫉妬は怖いですからねーたとえ友達だつたとしても別問題、みたいな。休みが明けてからは、まあ、自慢じやないですけど一通りのテンプレは受けましたよ」

たはは、と苦笑いで乾いた笑みを浮かべる一色は、本当に苦しそうで。……つたく、本当に自慢できねえよ。笑い飛ばせもしねえ。

「で、その程度だつたらあーはいはいつて感じで流せたんですけどね。

バレたんですよ、嫌がらせのことが、彼に。……で、多分彼のとつた行動は、最悪のものだつたんですよ」

はあ、と息を吐き出すと、一色は遠い昔を見ているかのよう、そんな顔をしていた。

「彼、犯人を探し始めたんです。しかも、また皆を巻き込んで」「…………はあ？」

流石の俺も思考が真っ白になる。なんだそれは。そんなもので犯人が見つかるとでも本気で思つてゐるのだろうか。そんなもの……

「……ただの公開処刑じやねえか」

「ですよねえ」

仮に事件を起こしたとして、解決法は二つ。犯人の自供か、警察による逮捕。前者であれば探すまでもなく、後者は秘密裏に捜査は行われる。自供しない犯人は必至で隠し通そうとするのだから、「あなたが犯人ですか?」等と聞いて首を縦に振る奴などいるはずがない。

「けど彼はやりました。『いろはが虐めを受けている。こんなことをしたくはないけど、もしこの中に犯人がいるなら名乗り出てほしい。誤解があるなら、話し合えば、きっと分かり合える筈だから』って」「何だそれ……性善説でも語るつもりか?」

性善説とは、人は生まれながらにして善とする、という定説である。つまり、根つから悪い人間はいない。故に、全ての事柄は思い遣りと話し合いによつて解決できる、と。

……ヘドが出る。

「彼は『善人』を演じたかつたんですよ。美男美女のお似合いカップル、虐めを話し合いで解決して、彼女を守つた頼れる俺アピールがしたかつたんですよ。……そんなこと、私は頼んでもいなかつたのに」
……彼は間違えたんだ。いや、知らなかつたんだろう。人の醜さを、人間の業の深さを。もしかしたら、知つた上で信じたくなかつたのかもしれない。

人は所詮自分が一番大切な生物だ。簡単に命や正義の尊さを美化して語つても、それらをいざ実践できるものなどそはいない。自分

の保身のためなら、いとも容易く人を裏切り、切り捨て、蔑む。一色が受けた仕打ちが最たるものだろう。そういう点では、俺は性善説など微塵も信じちやいない。寧ろ性悪説を推奨するまである。

「結局、虐めは無くなりませんでした。それどころか、余計に酷くなつて、最早私の手に負えるものではなくなつてました。先生にも相談しました。直接的な危害を受けてないなら氣のせいだつて突っぱねられましたけど」

所詮、教師もそんなもんだ。結局は自分達のことを第一に動く。虐めなんて厄介事、一人を救うためにリスクを負うより一人を犠牲に押さえ込んだ方が何倍も楽で、合理的だ。学校のブランドに傷がつくこともない。一人の生け贅で他の誰もが笑顔の理想郷ユートピアの完成だ。

……しかし、そんなものは真っ赤な「偽物」だ。

「……それで、あいつはどうしたんだ？」

「結局、彼は何も変わりませんでした。ずっと『話し合えば』つてそればっかりで。……それで、日を跨ぐことに酷くなつていく嫌がらせが怖くなつて、学校に行くのを止めました。病欠とか、外をぶらついて時間を潰したり、色々。端的に言えば逃げたんですよ、私。学校から、クラスメートから、彼から」

話していくうちに思い出しているのだろう、一色の表情がだんだんと曇り始めていく。それでもなお、一色は話をことを止めようとはしない。

「でも、流石に始業式は親も来る手前行かないわけにはいかなくて……本当、嫌だつたんですけど、何とか行つたんですよ」

そこまで話して、一色は頭を下げる。まるで、自分の顔を俺に見られたくないとでも言いたいかのように。

「でも、ですね。やっぱり何も変わつてなくて、寧ろ酷くなつてて。それで、もう無理だつて、心が折れて。帰ろうとしたら、ですね」

「階段の踊り場から背中を押されたんです。……押されたのは、私が友達だと思ってた子達でした」

……何も、言えなかつた。それは、今まで無かつた明確な暴力。明確な、悪意。

「これ、見てください」

そう言つて、一色は自分の両手の裾を捲り上げた。
その両腕には、びつしりと包帯が巻かれていた。

「その時の怪我です。幸い、骨は折れませんでしたけど、ひびが入つて入院です。まあ、打ち所が悪かつたのか、一週間前まで意識も無くなつてたんで、こんな時期の入院になつちゃいましたけど」

その怪我からは、嫉妬、激情、憎悪……あらゆる「負」の感情が手に取るように感じられる。寧ろ、こんな悪意に晒され続けてよくも壊れなかつたものだと言わざるを得ない。常人なら間違ひなく壊れていただろう。

「……ねえ、せんぱい。私、何か悪いことしたんでしょうか？ 何か失敗、しちやつたんでしょうか？ 何で、こんなことに、なつたんでしょうかね？ 私……私……」

一色は、自分の体を抱くようにして震えている。手が痛いはずなのに、それすら忘れて。そうして、彼女の着ている患者用の簡素な服に、小さな斑点の染みが刻まれていく。

泣いている。一色は、頭を垂らしたまま泣いていた。

(そうだよな……何だからんだ言つても、こいつはまだ中学生、なんだよな)

ここまで強い悪意に晒され、こんな小さな少女が平気なわけがない

い。きっと、普段からいっぱいだつたのだろう。他ならぬ、俺だから、同じように悪意に晒されてきた俺だからこそ、この苦しみ、辛さは理解できる。

本当なら、ここは優しい言葉の一つでもかけるべきなのだろう。だが、俺はそんな柄じやないし、何より、そんなものは、一色の求めるものではないから。甘い言葉など、いくらかけたところで何の解決にもならん。

だから、敢えて俺は俺のやり方でやる。

「それで？」

「……ふえ？」

間抜けな声を上げながら顔を上げた一色は、透き通るような涙を流していた。きっと、中学のままの俺なら一日惚れして告白して振られちやうまである。いや振られちやうのかよ。

ともかく。

「それで、お前が過去に何をされてきたのかは分かつた。だがな、暴力を除けば多分俺の方がずっと酷かつたね。お前が受けた精神的ダメージなんかまだまだ。男子に話しかければ比企谷箇が感染すると言われ、肩がぶつかっただけで女子には泣かれ、告白をすればフランクされた上に次の日黒板の号外仕込みの公開処刑ときた。名前すらともに覚えられず、教師からは点呼を忘れられるまであつたな。まだまだあるぞ、存在そのものを否定される辛さをとことん話してやろうか？」

「い、いや、もういいです……」

俺の黒歴史大放出に、一色は明らかに引いていた。ぐ、何故か俺の心が痛いよう。だが……

「ほらな。止まつたじやねえか、涙」

「え？あ……」

いつの間にか、一色の涙は止まっていた。俺は後にも先にも、この時ほど自分の黒歴史に感謝したことはないと思う。

「人間が善人だなんて嘘つばちだ。誰だつて自分が大事だし、狡いこともするし、どこまでだつて卑怯にもなる。それほどまでに人間は、

今の社会は『悪意』で腐ってるんだよ。俺も、勿論お前もな

「私、も……」

「そうだ。完璧な人間なんていやしない。人間なんてもんは、どう足搔いたつて認めたくないもんは認めねえし、自分こそが正義だと思ってやがる。偽善的で差別的で、そのくせ自己意識だけは立派な保身と欺瞞^{ぎまん}で塗り固められた歪な紛い物だ」

そう。誰もが自分の価値観を持つていて、それを互いに押し付け合う。誰もが自分を善だと信じ、そりが合わない奴等は敵認定。俺だってそうだ。勝手に押し付けて、勝手に期待して、何度も傷ついてきた。一色は、勝手なイメージを押し付けられて、見せ掛けの虚像^{イメージ}に押し潰されてしまった。

立場や状況が違つても、誰もが同じ人間で、誰もが皆歪んでる。でもな。

「たとえ紛い物だろうと、歪んでいようが、真っ暗な闇から光を見つけられるんだつたら、そいつは『本物』なんだと、俺は思う」

俺は諦めてしまったから。本物など掴めるはずがないと、諦めてしまったから。

だが、目の前の少女は違う。初めて感じた悪意にどうすればいいか、受け入れ方を知らないだけだ。

ならば、俺が伝えてやればいい。一色、お前を覆う深い闇に、俺が薄汚く濁つた、でも確かな光を差してやるよ。

「俺がお前を手助けしてやるよ、一色。逃げたつていいじゃねえか。逃げることは負けでも間違いでもないし、そうして救われることだってある。どんな方法をとるにせよ、お前が望むなら、お前は『本物』になれる」

切つ掛けさえあれば、お前は『本物』になれる。

一色は、呼吸を忘れたかのようにぽかんとした顔をしたかと思うと、弾かれるように顔を伏せた。

「おい、一色……」

「……ですか」

「え？」

「……何なんですか、何なんですか何なんですか何なんですか！何でせんぱいはそうなんですか！変な言い回しや難しい言葉使うようなかつこつけなくせに！生理的に受け付けないキモい目のくせに！オタクなくせに！キモいくせに！何で分かつちやうんですか！何で分かつてくれちやうんですか！何で察してくれちやうんですか！知られたくないから、せんぱいには、弱いところを見せたくないから、必死に強がつて、空元気だして、頑張つて……なのに、なのにい：何でなんですかああ……」

もう一色は声を我慢できなくなっていた。俺のように悪意に晒され続けたわけじやない彼女は、その小さな体に溜め込んだ惡意を全て吐き出すように、感情を爆発させた。

「うわああああーーん!!」

俺の体にすがり付き、声も憚らずに感情を剥き出しにしたまま、一色は泣き続ける。

「せんぱあい！せんぱいせんぱいせんぱい！うわああああーーん!!」

「……よく頑張った。全部吐き出しちまえ」

辛い気持ちも苦しい気持ちも、全部俺に吐き出していけ。底の見えない闇は、お前の苦しみなんか全部飲み込んでやる。そうして、吹つ切つてしまえ。

そうすれば、お前はきっと、強くなれる。

第四話 そして、比企谷八幡は自ら闇に歩き出す。

「……お見苦しいところをお見せしました」

「いや、別に。俺がけしかけたみたいなもんだし」

あれから数分。一色はずつと、部屋に瀬谷さんが来るまで泣き続けた。おかげで涙まみれの一色が更に発狂すること数分。瀬谷さんと二人がかりで宥めること数分。ちなみに、瀬谷さんにはとりあえず帰つてもらつた。

結果、一色は大人しくなつたものの、毛布にくるまつてそっぽを向いている。

「せんぱいが悪いんです。普段はヘタレなくせしてああいうことを臆面もなく言つちやうんですから。もしかしてそうやつて傷心の女の子につけこんでかつこいいアピールしてみたら好きにさせられるかもとか思つてましたかすみません正直少しと言つかかなりグツと来て何なら今でもぐらぐら揺れてますけどこんな状態でせんぱいと顔会わせるとかありえないというか不可能なんでまた今度ということでおごめんなさい……」

「俺が悪くていいから。とりあえず落ち着け、一色」

そんなどんよりオーラ出しながら何かぶつぶつ言われたら慰めたはずの俺の立場がない。何なら虐めたんじゃないかとさえ錯覚しそう。……虐めてなかつたよね？俺。

「……なら、そのままでいいから俺の話を聞いてくれ」

ガリガリと後頭部を搔きながら、一色の返事を待つ。言葉こそ返つてこないが、一色の頭部が上下に軽く揺れた。了承したということだろうか。

「まず最初に確認しておく。お前はこれからどうしたい？」

具体的な言葉にせず、一色に抽象的な言葉を敢えて投げかける。「どうしたいか」とはそのまま、「一色いろはがこの問題をどうしたいか」という意味である。俺の持論で言えば、どんな問題だろうが、不可能は存在しない。諦めるもよし、傷つきながら抗うもよし、何なら

逃げるのだつて有りだ。問題は「解決」だけが解じやないつてこつた。
だからこそ、この質問は今後の方針に関わる避けては通れない問題で
もある。

「…私、は……変えたいです。今の自分を。今の環境を」
「……どんな手段を使つてもか?」

一色の答えは、自身と環境の変革。変革とは即ち上昇という名の野
望であり、破壊という名の現状の否定でもある。何かを変えるとい
うことは、何かを壊すも同義、ということだ。

そして、一色は俺の問いに、静かに答えた。

「……変えたいですよ、どんなことをしてでも。もう、流されるのは、
合わせるのは、弱いままは、嫌です」

相変わらず顔は見えない。しかし、その声音は、確かに力強く感じ
た。覚悟を感じた、と言うべきか。

「…分かつた。俺に考えがある。当然、お前にも手伝つてもらうぞ、一
色」

ならば、俺は一色に手を貸そう。それが、俺にできることだから。
一色に『本物』を見せてやる。
たとえ、どんな手を使おうとも。

「決行は……三日後だ」

「やあ、いろはちゃん」

「……お久しぶりです、大場くん」

「久しぶり。と言つても、三日前にも会つたんだけどね」

あれから三日。俺は、作戦の決行当日の病院のメインフロアに大場を呼び出した。まあ、呼び出したのは一色だがな。そして、一色に対してあはは、と笑つている大場だが、一色からの話を聞いた今、それはただ取り繕つただけの仮初めの薄ら笑いにしか見えん。正直、呼んでおいてなんだが直ぐにでもお帰り願いたいまである。

それでもここに呼びだしたのは、今回の作戦にこいつが必要不可欠だからだ。

「……楽しく話してるとこ悪いんだがな。大場、お前に話がある」

「……何ですか、比企谷さん」

まるで俺を無視するかのような態度だつた大場だが、声をかけられた以上返事しないわけにはいかない。返事を返してくれたはいいが、明らかに一色と話す雰囲気とは違う。

また、あの感覚だ。背中に水をぶつかけられるような感覚。あの時はこれが何なのか分からなかつたが、今ならはつきりと分かる。

何てことはない、これは「嫉妬」だ。考えてみれば当たり前と言えば、当たり前だろう。なし崩し的とはいえ、現時点では大場こいつと一色は恋人同士。自分の意中の相手が他の男と一緒にいるのは、やはりいい気分はしないだろう。嫉妬の感情を抱いたところで、至極普通の反応だろう。

……普通の人間なら、な。

ここからが、俺の出番だ。

「单刀直入に言う。一色と別れてくれ」

「……は？」

「……」

大場の目を真っ直ぐに見据えたまま、率直に言い放つ。大場は豆鉄砲を喰らつた鳩のような顔をしている。一色は、俺の服の裾を掴んだまま俯いている。

数秒たつた後、大場は慌てて表情を取り繕い、またも薄ら寒い笑みを浮かべる。

「は、ははは。びっくりしましたよ比企谷さん。一体何の冗談ですか？」

「冗談なんかじゃねえよ。何度も言う、一色と別れてくれ。お前なんか、こいつには釣り合わない」

その瞬間、僅かにだが大場の眉が動いた気がした。

「……もしかして、用件はそれですか？ そういった話でしたら、できれば場所を変えて——」

来た。大場は、まさに俺が望んでいた通りの台詞を口にしてくれた。

俺は、予め用意しておいた一言を言い放つ。

「何でだよ、別にここだつていいだろうが。悪いことしてるわけでもないしな。一色、お前はどう思う？」

「……私も、大丈夫です」

「一色さん！」

一色の言葉が想定外だったのか、大場が思わず声を荒げた。その声にフロアの他の患者や看護師達が何だなんだと俺達に注目してきた。それに気づいたのか、大場は一の次を続けられない。そんな大場を後目に、俺は更に捲し立てる。

「一色、お前からこいつと付き合つてることは聞いた。だが、俺はお前のことが好きになつちまつた。頼む、あいつと別れて俺と付き合つてくれ！」

一色に向かい合い、目一杯頭を下げた。この時点では、ギャラリーはざわざわとしだしていた。中には「がんばれ！」などの好き勝手言つてくれるやつもいるが。

「……すみません、せんぱい。気持ちは嬉しいんですけど、やつぱり無理です、ごめんなさい」

一色は、はつきりと俺に否定の言葉をぶつける。ギャラリーからも、落胆のような声もちらほらと聞こえる。昔の俺なら、一晩中枕を濡らしたことだろう。だが、今の俺には何の感銘も感傷も無い。

何故なら、これが打ち合わせ通りだからだ。

彼氏持ちの女なら、異性からの告白を断るのは容易だ。既に相手が

いるのなら、通常の道徳があれば二股がいけないことだと知っているからである。相手も、わざわざ危険を犯してまで踏み込むものもそういはないだろう。だから、俺が一色に嘘告白をし、一色がこれを断る。これで俺は「彼氏持ちの女に大観衆の前で告白し、振られた惨めな男」という印象を持つことができた。代わりに一色は、「大観衆の前で変な男に告白された、可哀想なモテる女」つてわけだ。ちらりと大場の顔を盗み見るが、明らかに安堵の表情を浮かべていた。

阿呆が、これで終わるわけが無いだろうが。

俺は頭をあげると、今度は大場の方へと歩みより、

「頼む、一色と別れてくれ！」

松葉杖さえ投げ出して、その場に土下座した。

「なっ!？」

「ちよ、せんぱい!?止めてください！」

突然の俺の行動に、大場と一色だけでなくギャラリーサえも、もはや動搖を隠しきれていなかつた。俺は頭を擦り付けたまま、大場のアクションを待つた。

「ひ、比企谷さん！止めてくださいよこんなところで！」

……大場、お前本当に俺の思った通りに動いてくれるのな。逆に怖えわ。好都合だけど。ギャラリーもざわざわし始めた。何かがおかしいと思いついたんだろうな。だが、俺のターンは終わらない。

「頼む、この通りだ！」

「比企谷先輩！」

「せんぱい！分かつた！分かりましたから。付き合つてあげますから、もうそんなこと止めてください！」

「え……いろ、はーー」

「大場くん。そういうことなんで、ごめんなさい……」

筋書き通りの超展開。俺は一色に支えられながら立ち上がる。まさか受け入れるなんて微塵も思つてなかつたであろう大場は、ただただ唖然としていた。

そんな大場に、俺は止めの一言を言い放つ。

「すまんな、大場。そういうわけだから。急に呼び出して悪かつたな。

それじゃ

簡潔な、しかしこれ以上無い明確な「終わり」。それを告げた以上、俺達がここにいる理由はない。俺は再び松葉杖を持ち、一色と共に離脱を図る。

「……ま、待て!!」

しかし、大場はそれを良しとしなかつた。大場の顔は驚きや困惑が練り混ざつたような表情で、先程までの薄ら寒い笑みは無い。「いろは！どうして僕達が別れるなんてことになるのさ！大体、そんなやつのどこがいいんだ！僕よりそんなやつの方がいいって言うのか!?」

もはや半ヒステリックにすらなりかけている大場。周りの目すら気にしている余裕は無いらしい。本人は相当狼狽しているみたいだが……俺は、内心笑いが止まらなかつた。

だつて、ここまでやり取り全てが俺の描いた筋書き通りの展開だからな。

三日前。

「三日後つて……何ですか？」

相変わらず毛布にくるまつた一色は、顔を背けたまま問いを返してくれる。

「まあ三日後じやなけりやいけないことは無いんだが……都合がいいんだよ。一色、三日後は何曜日だ？」

「今日が木曜日だから……日曜日ですね」

「そうだ。一般的に病院には平日じやなく土日に来る人が多い。学校

とか仕事とか休みになりやすいからな。できるだけ人の目が必要なんだよ。で、この日に大場を呼び出す

「え」

「気持ちは分かるが露骨に嫌そうにすんな。電話じゃなくてもメールとかでいい。仮にも恋人ならメアドのひとつでも知つてんだろ」

「まあ、知つてますけど……呼び出して何するんですか？」

「何、簡単な別れ話だ」

「別れ話だつて……それができれば苦労しないですよ……」

一色の声が沈んでいく。まあ、自分がずっと悩んでいたことをさも当たり前のように言われたら、落胆もするか。だがな。

「簡単だよ。付き合つた時と同じシチュで振つてやればいい。俺がお前に告白するから、それにはこつけて別れちまえばいいんだよ」

「告白……へあ!?」

いきなりがばつと毛布から顔を見せたと思ったら、真っ赤に染まった顔の一色が両手をぶんぶんと振りながら後ずさつていく。まあ、ベッドの上なんだけどな。

「ななな何いきなり告白する気になつてるんですか吊り橋効果ですか正直ぐらついてるところにそんなのされたら落ちちゃうに決まつてるじやないですかそういうのはずるです卑怯です告白とか冷静な状態で受けたいですしつかりと雰囲気作つてからがいいのでもう一度検討してからにしてくださいお願ひしますううう！」

「お前自分で何言つてんのか分かつてる？」

あまりの早口さに何言つてんのかもはや分からん。

「心配すんな。告白するふりだよ、ふり。シチュは俺が作るから、お前はその場その場で上手いこと話を合わせてくれればいい。それだけでいい」

俺の筋書き通りなら、それで全ては上手くいく。一色は納得してくれたのか静かになつた……と思つたら、また俯いて何かぶつぶつと言つ始めた。

「あ……あはは……そうですよね……せんぱいですもんね。告白とか嘘に決まつてますよね……知つてましたよ、ええ、知つてましたとも

……

「おーい、一色ー？」

心なしか落ち込んでいるようにも見えなくもない。何だ、納得してくれたんじやねえのか？

「大丈夫ですよ、分かつてます。……その、せんぱい」

「何だ？」

「それで、私は変われますか？」

「変われるか、か……

「んなことは知らん。変わるかどうかはお前次第なんだ、そこまで責任は持てん。あくまで、俺は手を貸してやることしかできないからな。だがまあ……どちらにせよ、お前は変わるとと思うぞ、俺は」

「せんぱいの言う『本物』に、ですか？」

うぐ、こいつ、ちゃんと聞いてやがったのか。さつきまでとはうつて変わつてニヤニヤしている一色から目を背ける。

「……まあ、お前がそうなれるよう頑張つてやるさ」

そして今。状況は思つた以上に上手く進んでいる。そして今までに、事態は最終局面に差し掛かっていた。

「せんぱい……？」

するり、と一色の手から抜け出す。悪いな、もう少し待つてくれ。さて、ここまでお膳立てしてやつたんだ。

最後まで醜く踊れ、大場。

「どうしてだと？んなもん、お前が一番分かつてんだろうが」

「何だと……どういうことだ」

大場が俺を睨み付けてくる。今の奴は冷静じやない。さつきまでは辛うじて保っていた敬語さえ忘れている。つまりは、これが「本当の大場大成」なのだ。笑う余裕すらなく、年上に敬語さえ使わず、こんな安い挑発にすら引っ掛けり、嫉妬で狼狽しきつた醜い有り様こそ、本当のお前なんだ。

さあ、その歪な仮面を碎いてやるよ。

「マジで分かつてねえのか？お前が一色に告白したのと同じ状況だつてことをよ」

「同じ、状況……？」

「だつてそだらうが。大勢のギャラリーの前で大胆な告白。したんだろ？お前も。断りにくいやなあ、たとえ好きでもないやつだとしても」

「何だと……」

「今の一色はそん時と同じだつてんだよ。さつき俺の告白を嫌々受け入れたのがその証拠だ。こんな大勢のギャラリーに晒されての告白劇、しかも好きでもねえやつからなんてロマンの欠片もねえ、ただの悪ノリ公開処刑だ。いい加減分かれ、てめえは一色にこれっぽっちも好かれてなんかなかつたつてことをよ」

「ふざけるな……」

大場は両手を握りしめたまま、わなわなと怒り、震えている。煽り耐性低いなこいつ。まあ、俺がやることは変わんねえが。

「ふざけてねえよ、大真面目だ。お前自分の立ち位置くらい分かつてんだろう？クラスのトップカーストが同じトップカーストに告白して、円満に解決するとでも思つてんのか？断られたときにどうなんのか考えたことあんのかよ。：ねえよな、今みたいに大観衆の前に置いてしまえば、お前は一色が断らない。そう踏んでいたからこそ、あんな選択をした」

「黙れ……」

「一色は自分の立ち位置を理解してた。だからこそ、角が立たないようにお前の告白を受け入れた。良かつたじやねえか、思い通りにいつてよ。嫌々ながらでも、一色と恋人になれてよ」

「黙れええええっ!!」

ついに弾けた。周りの目など、大場にはもはや関係ないのだろう。俺の挑発で大場の中に溜まっていた怒りが許容量を越えたのだ。溢れてしまつたのなら、外に漏れ出すしかない。

「知つたような口を利くな！確かに、いろはは僕のことを好きじやなかつたかもしない。でも、僕は僕なりに君に振り向いてもらえるよう努力してたんだ！それの何が悪い！」

「……別に、努力云々を否定するつもりはねえよ」

「なら！」

「ただな」

「その結果が、一色の入院沙汰な訳だが、それについてはどう思う？」

大場の言葉が、ピタリと止んだ。

「聞いたよ、一色に何があつたのかも、お前が何やつたのかも。当然、妬み嫉みでこうなることくらい分かつてたんだろう？で、お前は何やつてたんだよ。一色がこんなことになるまで、お前は一体何やつてたんだ」

「それは……いろはが虐められてると知つたから、だから、僕はいろはを守ろうと、犯人を探して……！」

「犯人を探して、何だ？『一色への虐めを止めてくれ』とでも言うつもりだつたか？だとしたらとんだお笑い草だ」

「それの何がいけないんだよ……」

「何がいけないのか分かんねえこと自体が駄目だつつつてることにまだ気づかねえのか。お前、クラスメートに『君は犯人ですか？』なんて聞いて『はいそうです』なんて答えるとでも思つてたのか？性善説の賢人気取りもいい加減にしろよ」

「相手は同じ人間だ！ちゃんと話し合えばきつと……」

「だからそれがそもそも間違いだつて気づけ。話し合えば解決する？んはわけあるか。だつたら初めつからこんな面倒事になつてねえん

だよ。話し合えるようなやつが虐めなんて陰惨なことするわけねえだろ」

「そんなことはない！最初から悪いやつなんてーーー」

「理解しねえやつだな。話し合えば解決できるんだろ？見てみろ、俺とだつて分かり合えてねえじやねえか。それに、犯人とも話し合うんだろ？一色に直接危害を加えたやつは別としても、その前に虐めに加担していたその犯人とやらは見つかったのかよ」

「そ、それは……」

「ほら見ろ。結果が全部語つてんだよ。お前のやることなすこと中途半端で、何も進展しちゃいねえ。むしろ悪化させてるまである。お前の言う『善人』なんていやしねえんだよ、誰もが皆腐つてんだよ。……お前も含めてな

「僕も、だと……」

「ああそうだ。お前一色が入院して、初めて来たのが三日前だつたよな。そん時には入院して一週間経つていた。そこまで一色のことを想つてたならお前、何で一度も見舞いに来なかつた？」

「それは犯人を……」

「探していたからか？放課後くらい来れるだろ。それだけじゃない。お前犯人を探してどうする気だ？」

「それは、直接謝つてもらつて……」

「解決つてか？それ、本気で言つてんなら頭腐つてんじやねえのか？謝つてはい終わり、なんて子供のうちだけだ。どんだけ謝ろうがやつたことは無かつたことにはできねえし、やられたことは忘れねえんだよ。それに、犯人が分かつて晒しあげたところで、今度はそいつらが新しいターゲットになるだけだ。逆上して、余計に一色に危害が及ぶかもしれない。そこまで考えたことあんのかよ。間違つてんだよ、お前の言う努力つてやつは。結局、負の連鎖は止まらねえんだよ」

「晒すだなんて、そんなこと……」

「そういうことなんだよ、お前が言つていることは。それにお前、さつき一色を守るためだつつてたな。なら簡単だ。さつさと一色の前から消えろ。はつきり言うが、虐めの原因はお前だ。お前が手を引け

ば万事解決だ

「それは……」

「できねえのか？お前の掲げる皆仲良くなつてのはこの方法以外にあり得ない。それとも何か？自分の欲望のためなら一色を犠牲にするとしても？自分が良い思いをするためなら一色がどうなるうと知つたことじやねえってか？」

「せんぱい……」

俺は何で熱くなつてているんだろう。何でこんなにイラつくのだろう。

多分、腹が立つて いるんだ。

理想だけを語り、自ら何もしないこいつに。

汚い現実から目を背けるだけのこいつに。

正義だけをがむしやらに掲げ、自らが傷つくことから逃げ続ける、歪んだこいつに。

正義つてのは素晴らしいものだと思う。だが、そんなものがまかり通るのはいつだつて嘘だ。多くの助かる人の裏側で、どうしようもなく、救いもなく傷ついていく人がいることを知つたから、俺は仮初めの正義を信じない。

誰かが言つた。信じられるのは自分だけだと。だから、俺は他人を頼らない。たとえ、それで何かを壊すことになつたとしても、業を背負うことになるとしても。

俺は俺らしく、卑屈で、歪で、ひねくれた俺なりの正義を貫こう。たとえ、何と言われようとも。

「……」まで言われてまだ分かんねえのか？お前が一色をどう思おうと、そんなことはどうでもいい。だかな、はつきり言えることは、お前は一色にとつて恋人でも、善人でも、ましてやクラスメートですらない、ただの『害』なんだよ

「せんぱい……」

「……」

「言い返せねえよな。お前以上に一色のことを知らない俺でさえここまで言えるんだ。おまけに、今までの話を思い出せよ。お前、一つで

もまともに言い返せたことあつたかよ？ねえだろ、全部図星だもん

な

「せんぱい……！」

「……」

「結局お前がやつてたのはただの善人ごっこなんだよ。自分だけの感情で突つ走つて、周りを、一色を巻き込んで、できもしれ精神論を説くくせに自分じや何もしない、できない。その他大勢の力を借りないと強く出れねえくせに、物事の挙げ句一色がこんな状態になつてもまだ自分のことしか考えてねえ。ははっ、こんな屑初めてだ。まさか俺以上に最底辺の存在がいたとはなあ」

「せんぱい！」

「……れ」

「だつてそりゃうが。人の醜い感情を無視して都合の良いものだけ見て、その犠牲になつた一色を労りもしねえ。何なら一色のことを奴隸とでも考へてるまである。俺も自分をかなりキモい屑野郎だと思つてたが、ここまでじやねえよ。いやあ負けた負けた。お前の勝ちだよ、大場。せいぜいこれからもその下らない持論を掲げて偽物の笑顔を振り撒いていけよ、なあ！」

「黙れええええっ！！」

本当に思い通りに動いてくれるな、こいつ。しかし、流石に煽りすぎたが、大場が腕を振りかぶつて突進してくる。やべえ、あれ本気の一撃だわ。一発もらうまでは予定通りだが、やべえ、あれすつげえ痛そう。

思わず、来る衝撃に備えて目を閉じる。
ぱあんっ！

衝撃は、思わぬ所からやつて來た。ポカンと顔を開けた俺の目に入ってきたのは、

「……」

俺にビンタをかまし、その目に涙を溜めた、一色だつた。

「一色…お前……」

「せんぱい、もういいです。もう、いいですから……」

「いろは……どうして……」

手を振りかぶった体勢のまま、大場も啞然としている。そんな大場に、一色は静かに言い放つ。

「大場くん、ごめんなさい。今までのは全部演技だったの。このせんぱいに協力してもらつてたの」

「おい、一色……」

突然何を言い出すんだこいつは。せっかく思い通りに進んで、後は一発殴られてはい終わりつてところで。

慌てて俺が弁解しようとすると、一色の顔が写る。その顔は、「任せ」と言っているような気がして、俺は一の次を続けられなかつた。「……な、なんだ！ やつぱり嘘だつたのか！ いやあびっくりしたよ。そうだよねえ、君があんな男とだなんて……」

「でも、大場くんと別れるのは嘘じやない」

瞬間、大場の顔が凍りついた。嘘だというカミングアウト、元サヤに戻れるという期待からの拒絶。……一色さん、中々えげつないですね。

「分かんないですよ、何でか。ついさっき、あなたがそういう人だつて分かりましたから。……あなたにとつて、私って何ですか？ ブランド？ 人形？ それとも、せんぱいに言われた通り奴隸だとでも思つてたんですか？」

「そんなこと……」

「ありますよ、そんなこと。私が虐めにあつてることを知つた時、私あなたにあんなことしてつて言いましたつけ？ 女の嫉妬なんて慣れてましたし、あのくらいどうつてことなかつたんですよ。なのに、あなたがそれをおかしくした

「そんなつもりじゃ……」

「関係ないんですよ、その気があつたかどうかなんて。あなたは良かれと思つたのかも知れないですけどね、結果がこれなんですよ。無駄に刺激して、横やり入れて、搔き乱して、こんな大事になつてるんですよ。自分勝手もいい加減にしてください」

「いろは……」

「名前で呼ばないでください、気持ち悪い。それに何ですか？さつきせんぱいのこと『こんな男』呼ばわりでしたよね？そんなこと言える立場ですかキモいんですけど。確かに、このせんぱいは目がキモいしひねくれてるし無駄にかつこつけだし正直何考えてるのか分かんなくてぶつちやけ不気味ですけど」

あれ？なんで俺デイスられてんの？今そんな場面だつけ？やばい、ビンタの痛みも合わせて泣きそう。

「……だけど、会つたばかりの私のことを気にかけてくれて、思いやろうとしてくれて、道を示してくれて。大場くん、あなたなんかより、よっぽど私のことを考えてくれてた。正直、こんな面倒くさい女のことになんて無視すればいいんですよ。ほつといてくれればいいんですよ。なのにこのせんぱいは、どうしようもない自分の黒歴史を持ち出してまで私の話を聞いてくれて、吐き出せって言つてくれて、何とかしてやるつて言つてくれました。ひねくれて、理屈っぽくて……でも凄く、嬉しかったんです」

「一色……」

「せんぱい、ありがとうございます。でも、ここからは私に任せて下さい。…私が、言わなきやいけないことだから」

「い、いろ」

「呼ばないでつて言いましたよね？私、今やつと分かりました。確かに今までは大場くんのことを好きじゃなかつたです。でも、それだけでした。でも、今は違います」

そこで、一色は言葉を切り、そして。

「今は、あなたが嫌いです」

止めを刺した。

「金輪際、私に関わらないで下さい。目障りです。……皆さん、お騒がせしてすみませんでした」

一色がギャラリーに謝罪すると同時に、静かだつたギャラリーに少しづつ喧騒が戻ってきた。相変わらず、大場は固まっているが。

「せんぱい、行きましょう」

「お、おい、一色」

そのまま、松葉杖^{さやじ}と一色に引つ張られながら、ロビーを後にした。こうして、それぞれの心に様々な形で傷を残しつつ、一つの問題は終わりを告げた。

第五話 一つの繫がりは壊れ、やがて新たな繫がりを結ぶ。

「……せんぱい。私、怒ります」

「ええ……」

あれから、一色に部屋まで連れて（引つ張つて）こられ、ベッドに座らされると、仁王立ちの一色に尋問の構えをとられている。

「確かに、せんぱいに任せましたよ。でもせんぱいがあなことするなんて、私聞いてません」

「……まあ、話してないからな」

「なんであんなこと言つたんですか？最初の嘘告白の一件だけで、終わつてたことじやないんですか？」

……こうなつたら話すしか無いのかねえ。できれば話したくなかつたんだが。

「そりや、あそこで終わつても良かつたんだけどな。できれば、徹底的にお前と大場^{あいだ}の繫がりを絶つておきたかったんだよ」

「…どういうことですか？」

「考えてみろ。あのまま終わつてたら、あいつならクラスで『一色が変な男に奪われた。きっと脅されているんだ。取り戻すのに力を貸してくれ』なんて言いかねん。お前も分かつただろ？あいつは、ただ誰からも好かれておきたいだけだ。下手に他のやつらを巻き込んで俺に敵意が向くだけならまだしも、そんなことになれば、ただでさえ気が立つているやつらを更に刺激しかねない」

そうなれば、最悪もつと酷い事態が一色に降りかかるてくることもあり得た。だから、何としてでも全ての敵意^{ヘイト}を一色から逸らす必要があつた。

「そこで、俺があいつの矛盾や理念を徹底的になじつて、あいつの敵意を俺に向けさせた。そうすれば、『一色が奪われた』じゃなく、『あの男が一色を無理矢理奪つた』って思わせられると思つたんだよ」

クラスでリーダー格のあいつのことだ。きっとクラスでもそのこ

とを話すだろうし、一色を虐めていたやつの耳にも入るだろう。主に嫉妬で動いていた奴らだ、女子が圧倒的に多いだろう。そうすりや、一色を虐めることなんかより、傷心の大場に自身をアピールした方がずっとリスクが低く建設的だ。周りに良い顔をしたいあいつなら、クラスの女子を無下にすることも、反論もしづらいだろう。自ずと、一色を取り巻くヘイトを外すことができるはずだ。

「それに、俺があいつを煽つて殴られでもしたら、あいつの地位は完全に失墜する。所詮は転校生、暴力沙汰を起こしたやつにまでついていくやつなんてそういうはないだろ」

正直、ここは賭けだと思つてはいた。逆恨みもそうだが、それが俺じやなく一色に向かう可能性だつて少なからずあつた。それに、俺はあくまで学校でのあいつを知らない。仮に暴力沙汰にしたとしてもついてきてくれるやつが大勢いたら、俺もただじやすまなかつたと思う。

「……正直、作戦だなんて大層なこと言つてたけど、結構穴だらけだつたんだよ。俺にできたのは問題の『解決』じやなくて『解消』くらいだから。完璧な答えなんてねえんだから、一番効果を期待できる方法でいつた方が良いに決まつてる。だから——」

「だから、せんぱいは自分が傷つくようなことをしたんですか？」

「え……？」

半ば自棄的な笑みを浮かべながら一色を見ると、

一色は、また泣いていた。

「せんぱいはそれでいいかも知れませんけど、私はどうなるんですか？確かにせんぱいには助けてもらいました。結果として大場くんとは別れられましたし、せんぱいの思惑は当たりました。言いたいことだつて言えました。でも、私は……せんぱいに傷ついてなんてほしくなかつた。私の問題で、私のせいだ、関係なかつたせんぱいを……傷つけるなんて、そんなの嫌ですよ……」

一色は、涙をこらえながら、静かに俺の心に訴えてくる。……ああ、やっぱこの方法じゃ駄目なのか。女の子を泣かせたなんて、小町に知られたらどやされちまうな。新たな黒歴史の追加だ。

でも、せめて。

「勘違いすんな」

「ふえ……」

せめて、最後だけは。

「俺はお前のためにやつたわけじゃねえし、傷ついてなんてねえよ。むしろ、思い通りに進んで快感だつたまである。俺はあいつがムカついて、俺が納得するためにやつただけだし、結果としてお前が救われたつてだけの話だ。お前が気にやむことなんか一つもねえんだよ。というか、最後の方は大体お前のせいで台無しになつたんだしな。つか、いつまでも萎れてんじゃねえよ、そういうのキモいんですけど」最後だけは、笑ってくれ。いつものような、あざとい笑顔でいてくれ。

「……何なんですか、もしかしてそれ私の真似ですかだとしたら鐘すら鳴らないレベルで似てないんでは出直してもらえますかそれにその態度何ですかツンデレですかいやひねくれてるせんぱいだからひねデレですかそういうのも相変わらずキモいんで止めてもらえますかごめんなさい」

「……なんだよ、やりやあ出来るんじゃねえか」

一色は、いつも通りのマシンガンお断りをかますくらいには余裕が戻ってきたようだ。心なしか、少しだが笑つてているように見える。

そうだよ、俺はその笑顔が見たかつたんだ。

「にしても、お前こそなんであんなこと言つたんだよ。黙つときや万事解決だつたのによ」

「……それは、まあそだつたんですけど。せんぱいの考えが分かって、話がどんどん進んでいくにつれて思つたんです……私は、全部せんぱいに押し付けてただけじゃないかつて」

仁王立ちの構えを解いた一色はそのまま自分のベッドに腰をおろす。

「せんぱい言つたじやないですけど、大場くんに、私のことをどう思つてるかつて。私も考えたんですけど、私にとつてせんぱいが何のかつて」「んなもん、ただ同室つてだけのひねくれた面倒な男つてことだろ」

「確かに間違つてはないんですけどお」

「おい」

少し皮肉を言えばこれかよ。

「なんと言つたんですね、私、今まで人に素の性格で接したことつて無かつたんですよ。皮肉でもなんでもなく、私は自分の価値をちゃんと理解してたんで、いつも猫被つてたんですよ」

頭脳、身体能力、容姿。いずれにせよ、優れているということはそれだけで嫉妬の対象となり得る。自分の持つ嫉妬^{それら}の対象を正確に理解していたからこそ、問題を起こさないように、刺激しないように、一色は一色なりに気を遣いながら生活してきたのだろう。俺には具体的なことは知るよしもないが、並大抵の努力でないことくらいは想像に難くない。

「……でも、せんぱいに対しては違いました。もちろん、学校とか色々違うからつていうのもありましたけど、何か、どれだけ猫被つても意味無いって言うか、見透かされそうな、そんな気がして。気づいたら、素のまんま話してました。何て言うか、上手く言えませんけど、私にとつてせんぱいは、今まで出会つた他の誰とも違う、そんな存在なんだなつて」

「……」

中学時代の俺ならば、これだけで勘違いしていただろう。自分にだけ気を許していると。自分が特別なのだと。

しかし、今の俺なら、一色の感情を冷静に感じとることができ。今、一色の抱いている感情は間違つてる。それこそ、吊り橋効果つてやつだ。そんなものは、本当の気持ちじゃないから。だからこそ、もう黒歴史は作らない、作らせない。俺も、一色も。

「ですから、せんぱい……」

「……一色、お前は勘違いしてる。俺はお前が思うようなやつじやない。お前が知らないだけでもつとたくさん酷いことしてるし、キモいことだつてたくさんある。お前の中にある俺は、あくまでこの危機的状況の中で彩られた都合の良い紛^{レブリカ}い物だ。……そんなもの、『本物』とは言わない。俺は、そんなものに答える気はない」

「……」

一色は黙り込む。俺は、助けを求められたから手を貸しただけ。そこに特別な感情など有りはしない。

だから、俺達の関係はここで終わりだ。これからは、「ただの相部屋同士」の関係に戻るだけ。交わることのない、その他大勢の関係に戻るだけ。

そう、それだけなんだ。

「……そう、ですね。そうですよね。せんぱいは、そーいう偽物が嫌いですもんね。多分、私のこの想いは偽物なんだと思います」

「……そうだ」

そうだ、これでいい。これでいい、はずだ。

「せんぱい……」

なのに、何で……

「……どうして、そんな辛そうな顔をしてるんですか？」

「え……」

知らなかつた。俺は今、一色によると辛そうな顔をしているらしい。……感情と表情が繋がつたのは、久しぶりな気がする。

「……多分、眩しいんだ、一色が」

「わ、私が、ですか？」

「ああ……俺は、ずっと『本物』が欲しかつた」

「言つてましたもんね、ずっとずっと」

「うつせ。……今回の件で、何となく分かつちまつたんだよ。お前の話を聞いて、手を貸すと決めてから、俺は咄嗟にあの解決法が浮かんだ。まるで予め用意されてたみたいに、本当にごく自然に、あれが一番効率が良いって、そう思つた。自分を矢面にあげて、表面上の関係を粉々にして……それが最適だつて。……そん時に同時に、どう足搔いても俺は『本物』にはなれないんだつて、どつかでそう思つちました」

どんなにかつこつけても、どれだけひねくれてみても、心にずっと残つていた。『本物が欲しい。本物になりたい』つて。

でも、今回で漸く分かつた。『本物』を求める俺でも、実際はただ壊

すだけの方法しか取れない。本当の意味で、誰かを救うことなんてできないって。それは、俺の思い描く『本物』には程遠いから。

だから、俺は『本物』にはなれない。

「だから、俺はお前が眩しいんだ。俺の作戦の真意を理解して、自ら行動を起こしたお前が。本当の意味で他人のために泣けるお前が。俺みたいに諦めて停滞せずに、前に進むことを選んだお前が。……強いお前が、俺には眩しすぎるんだ」

光と闇は表裏一体だ。光がなければ闇も生まれず、逆もまた然り。しかし、そんな関係であつても、光と闇が交わることは、決してない。

「……訂正します。さつきの言葉」

「え？」

「『今はまだ』です。……せんぱいも、間違っていますよ」「何……？」

一色が呆れたように溜め息を吐く。そのままベッドを立ち、俺の隣に腰をおろす。

「お、おい、一色……」

「私も、せんぱいが思うような人間じゃないです。私は、せんぱいに話を聞いてもらうまでは、ずっと悩んで、苦しんで、辛くて、全部投げたそうとしてた弱い人間です。猫を被り続けてずっと周りを騙して生きてきた、偽物の人間です。せんぱいが私のことを眩しいって言ってくれるなら、強いつて言ってくれるなら、それはせんぱいのおかげです。せんぱいが力を貸してくれたから、私は小さな強さを持てたんだだと思います。一人じや絶対無理でしたよ、あんなこと」

えへへ、と笑う一色は、あの時の泣いていた小さな姿とは程遠く……その姿にやはり、一色は強いのだと改めて思う。

「だから、私の強さはせんぱいのおかげです。私が眩しいほど輝けるのはせんぱいのおかげです。私が、『本物』だって言うのなら、それこそせんぱいのおかげです。もし、せんぱいが自分を悪く言うなら、それは私に言つてると同じなんです。せんぱいは認めないかも知れないですけど、せんぱいだつて、私から見たら立派に輝いてますよ？くすんでも、加減が弱くとも、ちゃんと輝きながら何かを照らして

ます。ですから、そんなせんぱいが『本物』になれないって言うなら……」

そして、一色は俺の肩に頭を乗せたまま、上目使いでこう言つた。

「私が、せんぱいの『本物』になつてあげますよ」

混じりけのない、心の底からの笑顔。その笑顔は、今まで悩んでいたのが馬鹿らしくなるような、そんな笑顔だった。

「……やっぱ、強えよ。お前は」

「せんぱいのおかげです」

「一色は、これほどまでに俺を信じてくれている。漫画の主人公みたいに円満に解決するでもなく、ただ暴れて、壊して、解消することしかできなかつた最底辺の俺なんかに、純粹で真っ直ぐな信頼を押し付けてくる。

「……一色、お前の言葉は素直に嬉しい。けどな、どう足搔いても、これが俺だ。きっとこのひねくれた性格はこれからも変わらねえしさつきみたいなやり方も変えられない」

「でしたら、その度に私がせんぱいを肯定します。何があつたって、ずっとずっとと信じます。そのひねくれて意地つ張りなせんぱいを、私は信じたいと思つたんですから。この想いだけは、絶対に偽物なんかじゃありません」

……全く、降参だ。

「お前、俺のことキモいとか言つてなかつたか？」

「まー目とかはアレですけど……仕方ないじゃないですか、この想いはどうしようもないんですよ」

「はいはい、あざといあざとい」

「むー、何で今それ言うんですかあ！せんぱいのばか！」

「おう、知つてる」

「むー！せんぱいのばか！あほ！八幡！」

「おい待て、八幡は悪口じやないよ？」

「知らないですよ、もう！」

さつき、「ただの相部屋同士」に戻ると言つたな？すまん、あれは嘘らしい。いい加減俺も認めよう。この俺の中にある、小さなそれを。どうしようもなくひねくれた俺は、また裏切られるかもしれないそれを、素直に認めるることはできないけれど。

「絶対に認めさせてあげますからね、せんぱい！」

「おう、やつてみろよ。やれるもんならな」

もう一度だけ、信じてみよう。一色いろはという、小さな光を。純粹だった頃の、『本物』への希望を。

この日、俺と一色を取り巻く繫がりは大きく歪み、崩れ、音をたてて壊れた。

しかし同時に、俺達は新たな繋がりを手に入れたのだと、そう信じている。

言葉などでは言い表せない、確かな繋がりを。

第六話 救われた彼女は、変わるために決意する。

『俺は、『本物』が欲しかった』

俺はあの日、一色に俺の全てをさらけ出した。強いところなんて一つもない、嘘と虚栄で塗り固めた脆い俺の本心を。それを、一色は笑つて受け入れてくれた。

『私が、せんぱいの『本物』になつてあげますよ』

同時に、一色も俺に全てをぶつけてくれた。こんな俺を信じてくれて、こんな俺の『本物』になつてくれると言つた。流石に、この想いに気づかないほど鈍感では無いつもりだ。勘違いでも無いと思う。

しかし、俺はやつぱり、まだ心のどこかで信じきれていないんだ。たとえ、それが一色いろはだつたとしても。頭で理解しても、本能が、俺自身が拒絶してしまう。「そんなものは本物じゃない。また裏切られるだけだ」と。

だからこそ、俺はまだ答えを出せないでいる。

「せんぱい遅いです！」

「だから松葉杖患者に何という無茶を」

「もう無くとも結構歩けるじゃないですかあ」

「安静にしどぐに越したことはない。つか、いい加減せんぱいは止めろと」

病院での大場晒し上げ事件から更に一週間。大分足も良くなつてきた俺は、感覚が鈍らないようになると、最近は適度に運動をすることにした。とは言つても激しく足を動かせるわけでもないので、松葉杖をつきながら病院の敷地内を回る程度なのだが。

と、いうわけで。今は一色と自動販売機の前に来ているわけで。

「もー、せんぱいが遅いから喉カラカラですよ〜」

「へーへー悪うござんした……つか、先に買ってりや良かつただらうが。何で待つてたんだよ」

「へ？ そんなのせんぱいに奢……買つてもらおうと思つたからですよ〜」

「一色さん？ 今「奢つてもらおうと」って言いそうになつたよね？ しかも言い直しても意味変わらないよね？」

「まあ別に良いけどよ……んで、何にする？」

「さすがせんぱいです！ 冷たいのなら何でも良いですよ〜」

「だからせんぱいは止めろと……はあ」

金を自販機に入れ、俺はマツ缶のボタンを押す。どんな時も、千葉のソウルドリンクは外せない。さて、一色の分は……と思ったが、よく見ると飲み物の大半が無い。炭酸やスポーツ飲料、果てはコーヒーすら無い。マツ缶もさつきので最後だつたようだ。ちゃんと補充してくれよ係りの人。さてどうするか……お。

「冷たきや何でも良いんだよな？」

「流石に奢つてもらう立場ですし、文句は言いませんよ」

そのくせ注文はつけるんですね分かります。つか、もう奢つてもらうことには隠さないんですね……ま、しゃあねえし、これで良いか。

「ほれ、一色」

「あ、ありがとうございますー……あの、せんぱい」

「何だ」

「これ、何ですか？」

「いろはす」

「見れば分かりますよ！水じゃないですか！」

一色に渡したのは、パッケージに「い・ろ・は・す」と書かれた水。世界を変えてまでキスがしたいらしい無駄にスケールのでかい歌を交えたCMの、あれ。

「仕方ねえだろ、冷たいのそれしか無かつたんだからよ」

「せんぱいコーヒー持つてるじゃないですか！そつちくださいよー！」

「やだよ、マツ缶は誰にも渡さん」

つか君、さつき文句は言いませんよって言つてなかつたつけ？相変わらず、一色はいろはす片手にぶーぶーぶーたれている。

「いいじやねえかよ、水でも。奢つてやるだけありがたいと思え。それにほら、何かお前と似てるだろ、いろはといろはす。お似合いじゃねえか、いろはす」

いろはといろはすつて似てるな。いいニツクネームじやね？少なぐとも「比企谷菌」よりは億倍マシ。……あれ？何でだろう。心が痛いよ……

「……いろはす、ですか。ま、まあ良いんじやないですかね……あ！良かつたらせんぱいも私のこといろはすつて」

「呼ばん」

「何ですか！」

相変わらずぶーたれながら、仕方なくといった感じでそのいろはすを口にする。べ、別に水を飲んでる格好が艶かしいとか、全然そんなの無いからね？

「あ、意外と美味しい」

まあ、水だけどね。ただの。

「経過は順調だね。この分なら、直に家に帰つても問題ないよ」

「そっすか」

いつもの検査中、小太りのドクターがカルテを見ながら俺にそう告げた。何でも、俺の足は治りがかなり早いらしい。当初は一ヶ月入院だつた予定が、一週間ほど縮まり、残りは自宅療養となるらしい。まあ登校予定 자체は変わりないし、そこまで感銘はない。

「じゃあ、また詳しい結果は後で報告するよ。とりあえず部屋に戻つていいよ」

「じゃあ戻ります。ありがとうございました」

許可が下りたので、検査室を後にする。

「せんぱい、お疲れ様です」

「おう。わざわざ待つてなくともいいのに、毎度毎度物好きな奴だな」検査室を出ると、向かいのソファに一色が座つて待つていて。待たなくていいと言つてはいるが、これまた全く聞き入れない。せんぱい言う割には言うこと聞かないよね。何、生意気な後輩なの？

「えーだつてえ、せんぱいと早くお話ししたいですし」

違うな、あざとい後輩だつた。

「で、どうでした？検査の結果は」

「経過はかなり順調らしい。この分だと来週中には帰れるそうだ」「……そうなんですか。良かつたですね！」

一瞬、一色の表情が沈んだ氣がしたが、気づいた時には元に戻つていた。やだ、小さな表情の変化に気づくとか、八幡一色を見すぎじゃない？

「せんぱいがいなくなつたらつまんなくなりますね？」

「俺はあざとい同居人がいなくなつて清々するわ」

「え、何ですか同居人つてもしかして同棲ですか頭の中では恋人ですか夫婦ですか確かに嬉しいですしそうなりたいとは思いますけど心の準備とか段階とかそういうのはちゃんとしたいのですまずは清いお

付き合いからでお願いしますごめんなさい」「

「言葉のあやだ、気にすんな」

マシンガンお断りは健在だが、最近は断られてない気がする。あの時のことでの吹き切れたのか、最近はむしろ歓迎されているまである。マシンガンお願いします？……語呂が悪い、没。

「あたたた……」

「まだ直りきつてねえのに無茶するから……」

ぶんぶんと手を振っていた一色が、急に手を抑えてうずくまつた。痛みがきたのだろう。全く、無茶すんなよ。

「私の退院予定日、せんぱいのちようど一週間後なんですよ、その間暇ですか。あ、せんぱいお見舞いに来てくださいよ～」

「あほか、何のための自宅療養だ。それじゃ病院にいるのと変わらないんだろうが」

暇なのは分からんでもないが、一色と違つて俺の怪我は足が主だ。足しげく通えるはずなど無い。

「聞こえたわよ、いろはちゃん。あんまり比企谷くんに我が儘言わないの」

「瀬谷さん」

いつものごとく一色があざとくしていると、瀬谷さんが溜め息をつきながら声をかけてきた。

「相変わらずね、あなた達」

「そう言う瀬谷さんこそ。お疲れ気味ですね」

「そうなのよ、さつきの検診でまーたあの偏屈爺さんがねえ」

鮮やかな金髪を無造作に広げ、うんざりしたような表情で瀬谷さんが遠い目をしていた。いつもお疲れ様です。

「ま、それはともかく。検診が終わつたなら早く部屋に戻りなさい。通路ど真ん中であんまりうるさくされると迷惑だから。ほらほら」

瀬谷さんに軽く「シツシツ」と手を振られる。ちょ、俺は虫か何かですか。

「言われなくても戻りますよ。それじや」

「あ、せんぱい！まだ話は終わつてませんよ！」

瀬谷さんに見送られながら、俺はそそくさと部屋に戻った。道中、一色の小言を背に受けながら。

「……せんぱい、いよいよ明日ですね。準備は万全ですか？」

「俺は何をする気なんだ、仰々しいわ。ただ退院するだけだろうが」
一色が妙に真剣な顔で聞いてくるが、何てことはない、明日は俺の退院予定日だ。もうギプスも外れ、普通に歩く分には殆ど支障は無い。たまに痺れが来るくらいのもんだ。

「いやあ、いろはさんにはうちの愚兄がご迷惑をお掛けしまして、愚兄に代わつて謝つときますね」

「いやあ小町ちゃん、それほどでも」

「おいら小町ちゃん？ 何で俺が迷惑かけた前提？ 少しはお兄ちゃんのこと信じてくれてもよくない？ 後一色、何さらつと認めてやがる。少しは否定しろ」

「でもお兄ちゃんのことだから、どうせ迷惑かけたんでしょ？」

「……かけたけどよ」

当然、退院するわけだから身の回りの整理をしなければいけないわけで、忙しい社畜の両親の代わりに愛しの小町が来てくれている。というのに、何故かさつきから俺がディスられ続けていた。解せぬ。
「ほおらやつぱり『みいちゃん』だ。本当にすみませんでしたいろはさん、相部屋の住人がこんな魚の目をした粗大ごみで」

「小町ちゃん？ ちょっと酷すぎない？」

小町ちゃん学校で何かあった？ つてくらいにディスり具合が加速

してゐる。悪口がゴーリングマイウェイするまである。

「……入学当日に事故つて多大な心配と迷惑かけたのはどこのごみいちゃんよ」

「……」の愚兄です。すみません」

「小町、本氣で心配したんだからね」

そう言つて顔を背ける小町。悪口のアクセラレートは俺のせいだつたか。ならば自業自得というものだ、仕方ない。

「小町ちゃんとせんぱい仲良いですねえ」

「お、いたのかお前」

「せんぱい酷すぎませんか!?」

実際忘れてはないが、ちよつと魔が差した。そうか、こういつた軽口の叩き合いも、明日からは無くなるのか。それは、確かに……（少し、物足りないかもな）

絶対、口に出しては言わんけど。

「別に仲良くは無いですよー。小町くらいじゃないと、このごみいちゃんに合わせられないだけですよ」

「ま、俺のハイブリットかつ高次元の会話についてこれる奴がいないのは否定せん」

「何言つてんのお兄ちゃん。お兄ちゃんのボキヤブライリーは千葉県横断幕ウルトラクイズ並みの千葉県愛とMAXコーヒー、後プロキュアくらいしかないじやんよ」

「うわー……プロキュアは流石にアウトですよ、せんぱい……」

「おま、何言つてやがる。年端もいかない美少女たちが人々の平和のため、戦い続ける孤高の戦士の物語だぞ。なんて素晴らしいぼつち精神」

「共感するところ、そこなんですね……」

「でもお兄ちゃん、プロキュアはチームだよ？ 一人じゃないよ？ お兄ちゃんじやなくない？」

「……それは言うな。後小町ちゃん？ お兄ちゃんをぼつちの総称に使うのは止めようか」

「やっぱり仲良いじやないですかー」

最愛の妹、小町は俺と違つて他人との距離の詰め方が上手い。何だかんだ一色と会うのは今日で二回目だが、この仲睦まじいこと、驚愕だね。つうか、今気づいたが、下の名前で呼びあつてんのかこの二人。恐るべき、トップカースト。

「お前ら本当に仲良いな。もう姉妹にすら見えてきたわ」

「え、私と小町ちゃんが姉妹ですかそれはつまり小町ちゃんが私の義理の妹ということですか確かに未来にそうなるかもしませんがいやそうなればいいなと思つてますが流石に色々飛び越えすぎな気がしますのでまずはプロポーズからお願ひします」

「お前もう断つてないよね?」

「そしてもう隠そとすらしていなか。恐るべき、一色。

「ん?んん……ん?ほほお……」

ほら見ろ、小町が何か嗅ぎ付けたじやねえか。こいつは妙なところで鋭いんだから。

「ま、いいや。それより、はいお兄ちゃん。荷物、簡単に纏めといたよ。後は自分でお願ひ」

「おう、あんがとな」

「いえいえ、愛するごみいちゃんのためですから」

愛してるのにごみいちゃんなのかよ。そろそろ八幡泣いちやうよ

?

「じゃあお兄ちゃん、いろはさん、小町はこれで」

「はい、小町ちゃんまたねー」

「おう、気をつけて帰れよ」

「ごみいちゃんじやないんだし大丈夫だよ」などと言いつつ、小町が部屋を出る。：最近兄としての威厳がどんどん削られてきている気がする。いや、元々無かつたのかもしれんが。全部真実だから言い返せないし。ぐぬぬ。

「……せんぱいは愛されますね」

「どうか?昔から心配ばつかかけてきたから、鬱陶しがられてそんなもんだけどな」

「あんなに軽口叩き合える人がそんなこと思つてるわけ無いです

よお

そう言つた一色の顔は、どこか寂しそうで。どこか、辛そうでもあつた。

「うちとは大違いです」

「……何か、あつたのか？」

ただ事ではなさそなその様子を、流石に無視することはできなかつた。

「……両親、離婚しちやうかもしれないんです。私のせいでの離婚。

まだ未成年である俺達には縁のない言葉だが、俺達の両親の立場で言えば現実味を帯びる言葉もある。一度は愛し合つて、一つの家庭を築いたもの同士がその決断を下すには、何か理由があるのでろう。しかし……

「お前のせいってどういうことだよ」

「……今回の入院事件で、私が学校で虐めをうけてたことがバレちゃいまして。それで、両親が喧嘩を始めちやつたんです。『おまえがもつとちやんとしてれば』……お互いにそう言い合つてました」「……」

恐らく、一色の両親は今、後悔しているのだろう。もつと一色と話していれば、もつと一色と関わつていれば、もつと自分がちやんとしていれば、一色をこんな目に遭わせずにすんだ……と。結果、自分の中から漏れだした怒りのぶつけどころが分からず、お互いにあたつてしまつたのだろう。

それは間違いなく、一色を想つているからこそこの行動。しかし、今の一色はそれを素直に受け入れられないだろう。自分のせいだと思つてしまつていて以上、まずはその概念を崩してやらなければならぬ。

今それをできるのは、俺だけだ。

「一色は、それでいいのか？」

「え……？」

「お前はそれでいいのか？お前の両親がお前のこと憎しみ合つて、喧嘩したまま別れて、家族がばらばらになつてもいいのか？」

「……そんなの、嫌に決まってるじゃないですか。でも、どうすればいいんですか……」

「こいつはこいつで、結構参つてゐみたいだな。……しゃあねえ、少しだけ、助け船を出してやるか。

「だつたら、話し合うしかねえだろうが」

「話し合う、ですか……？」

「ああ、元々俺達人間は言葉を交わす生き物だ。察してちやんなんて糞みたいな方法じやなく、泥臭く本音でぶちまけ合えばいいんだよ。そうしなきや、伝わらないことだつてある」

「……いかにもせんぱいって感じですね」

「うるせ。それに、現実問題話し合わなきやいけないことはまだまだあるだろ。俺が関わつたことだつて、結局あいつとの関係を絶ちきつただけで、学校内の問題が片付いた訳じやない。そういうの、ちやんと親と話し合え」

「……そう、ですね。忘れてました、そういうの」

「気づけたなら合格点だ」

「ふふつ。何だか、本当のせんぱいみたいですよ?」

「うつせ……まあ、何だ。うちもお前のうちも、そんな変わらんと思うぞ、俺は」

「へ?」

「子供は迷惑かけるもんだし、親はいつだつて子供を心配するもんだ。俺の両親も、そりやあ誉められることは無いけどよ。間違つたことすりや叱つてくれるし、忙しいなりに人並みの心配はしてくれる。お前んちだつてそうだろ。心配じやないやつのために、誰がそこまで怒れるつてんだよ」

「好きの対極は無関心」……なるほど、よく言つたもんだ。心配するくらい口うるさくなつて、間違えるくらい想われて、その感情の中心にお前はいるんだぜ、一色。

「……だから、お前も思つたことぶつけりやいいんだよ。まだまだガキなんだから、遠慮すんな。信じてやれよ、自分の両親くらい。……俺が言えた義理じやねえけどよ」

「……ほんとに、せんぱいが言えた義理じゃないですね」

「分かってるよ、そんなこと」

「信じる」……本当に、これほど俺に似つかわしくない言葉もない。俺が一番信じたくて、他人を信じられないくせに、人には周りを信じろとはな。

「……でも、ありがとうございます」

それでも、一色は俺に感謝を示す。混じりけのない笑顔を、俺に向けてくれる。……お前すら信じきれない、こんな俺にさえ、その笑顔を向けてくれる。

「せんぱいのお陰で踏ん切りがつきました。だから、ありがとうございます」

「……おう。別に礼を言われるようなことはしてねえけどな」

「こ、ういう時くらい素直になつてもいいんじゃないですか？何なら、あの時の返事でデレちゃつてくれてもいいんですよ？」

「……それは……」

「分かつてます。まだ信じられないんですね、私のこと。でも、それがせんぱいですし、私も無理は言いません。待つてますから、ずっと」

「……すまん」

「謝らないでくださいよ。しおらしいせんぱいなんていつにも増して不気味ですよ」

辛いだろうに、一色は態度を変えない。早く答えを聞きたいはずなのに、一色は待つてくれている。悟られないように、バレバレの空元氣を纏つてまで。

「私は、変わりますから。変わつて、せんぱいに追い付きます。だから……待つてくださいね？」

一色、お前が変わると言うのなら、お前が、『本物』になれると言つのなら。

俺も、いつか変われる気がするから。

「……ああ、期待しないで待つてるよ」

俺は俺らしく、ひねくれたまま信じよう。

今はただ、一色いろはの可能性を。

第七話 そして、強い想いを残しつつ、一人はそれぞれの世界へ歩き出す。

退院から六日。未だ学校にも行けず、特にやることもない俺は、今日も今日とて朝からソファで本を読み漁るだけの日々を送っていた。

「お兄ちゃんただいまー」

「おう、小町お帰り」

一日中ごろごろしても、今は平日。俺を除く世間の学生達は普通に学校へ行っていた。当然小町も例外ではなく、夕方になり帰宅してきた。

「お兄ちゃん、小町ちょっと買い物行ってくるけど。何か欲しいものとかある?」

帰ってきたかと思えば買い物。随分忙しそうだな。普段なら別に、と答えるところだが、今日に限っては違った。

「……いや、俺もついていつていいか?」

「ありや、普段めったに外に出たがらないお兄ちゃんが珍しい。何の風の吹き飛ばし?」

「吹き回し、な。別に、少しくらい動かねえと鈍つちまつて足が重いんだよ。週明けから学校行くんだから、慣れとかねえとな」

実際、ただトイレに行くだけでも足が重たいこともある。当初の通りに自転車で行くとしても、ある程度感覚を戻さなきやこの先心配だし。：後それ以上に八幡、小町ちゃんの頭が心配。何だよ、吹き飛ばしつつて。

「ふーん。ま、良いけどね。じゃあちよつと準備してくるから待つて」

「おう、四十秒で支度しろ」

「乙女の準備は時間がかかるんですー」

残念。小町にこのネタは通じなかつたか。

「お兄ちゃん、今日何食べたい？」

「何でもいいけどな。じゃ、カレーで」

「あいさー」

夕暮れ時、スーパーで今夜の食材を物色しながら、同時に献立の話し合いだ。両親が徹夜で帰つてこないことが多い我が家は、俺と小町だけの食卓になることも珍しくない。今日みたいにな。

「そういえば、明日だよね」

「……何がだよ」

「分かってるくせに。いろはさんの退院日、明日でしょ？」

唐突な話題に思わず、小町から顔を背ける。多分小町はにやにやしてるんだろう。……くそ、居心地悪い。

「…ねえ、お兄ちゃん。退院の時くらいは行つてあげない？今日まで一回もお見舞いに行つてないし」

「……明日くらいは行くつもりだ。流石にな」

…嘘だ。俺は、まだ迷つてる。

「嘘ばっかり。まだ迷つてるくせに」

「……！」

「団星、て顔してるね」

にしし、と笑う小町は、真剣な表情になると、俺の顔をまつすぐに見てきた。まるで、俺の本心を見透かすかのように。

「お兄ちゃん。小町はお兄ちゃんの過去を知ってるし、辛いことや苦しいことがあつたのは知ってる。だからお兄ちゃんが、簡単には人を信じられないことも。でもさ……いろはさんには、ちゃんと答えてあげて」

信じてあげて、でも受け入れて、でもなく、「答えてあげて」。つまり、結果はどうであれ、ちゃんと一色に向き合えと、逃げるなど、小町は俺にそう言っているのだ。

「小町は詳しいこと分かんないけどさ。この前いろはさんと話してたお兄ちゃん、すごく楽しそうだった。……でも今のお兄ちゃん、すごく辛そうに見える。お兄ちゃん、変わろうとしてるんだよね？でも変われないから、迷つてるから、それだけ苦しんでる。……そうお兄ちゃんに思わせたのは、いろはさんなんでしょう？」

「……けつ、何が詳しいこと分かんないけど、だ。全部お見通しじゃねえか」

「そりやあ、こんなひねくれたお兄ちゃんの妹を十年以上やつてるからね。お兄ちゃんのことは何でもお見通しだよ。あ、今の小町的にポイント高い！」

「はいはい、俺的にも超高いよ。本当にな」

なんなら小町。ポイントカンストまである。そんなポイント無いけど。

「お兄ちゃん。気持ちは行動にしなきや分かんないけどさ、行動は、何も言葉じやなきやいけない訳じやないんだよ？」

「……そう、だな」

俺は、まだ一色に返事を返すことはできない。だけど、少しでもあいつのためにできること……いや、違う。

俺が一色にしてやりたいことは、ある。

「すまん小町。ちょっとだけ寄り道していいか？」

「あんまり遅くなるとご飯できないから、小町は先に帰つて準備してるよ。お兄ちゃんはやりたいこと、分かつたんでしょう？だったら、納得いくまで寄り道してきなさい」

「……すまん、助かる」

小町が俺の妹で良かつたと、本気で思う。こんなひねくれた兄を叱咤してくれる、兄想いのこの上無い妹だよ。

「あ、ついでにアイス買ってきてねー！」

……最後のが無ければなあ。

「はーい、どちらさまですかー？」

病院の扉を手の甲で叩くと、中から間延びした返事が聞こえる。
……しばらく聞いていなかつただけで随分懐かしい気がするな。

「……おす、一色」

「いろはさん、お久しぶりです！」

「……せんぱい！ 小町ちゃんも」

「あら、久しぶりね、比企谷くん」

相変わらずの一色はベッドにもたれ掛かったままで俺達に手を振つてくるし、側で荷物を纏めていたのであろう瀬谷さんも相変わらずだ。……つたく、一色。また響いても知らねえぞ。

一色も瀬谷さんも相変わらずだが、部屋の中にはいつもとは違う人物が二人いた。

「……どうも、相部屋だつた比企谷です」

「ああ、君が……どうも、いろはの父です」

「いろはの母です。この度は、うちの娘がご迷惑をおかけして……」

一色の両親。今日が一色の退院日なのだから、ここにいること自体は不思議ではないのだが、何分初めて見た上にいきなりのお辞儀に少し萎縮してしまう。

「ああいや、別に迷惑とかは……」

「そうですよ、いろはさんのお父さんお母さん。どつちかと言えばうちの愚兄の方が迷惑かけてたと思いますし」

「そうですねー。どつちかと言えば私がお世話してましたね、せんぱいを」

「確かに言えてるわね」

「おいこら」

初対面の親御さんの前でいつものノリはやめてくれない？恥ずかしそうに、どんな公開処刑だ。しかも瀬谷さん、小町ちゃん、君達も乗るんじやないよ。俺に味方はいないのか？……え？いつものことだつて？やだ、衝撃の真実に八幡泣いちやう。

「……なるほど、確かにいろはの言つていた通りだ。改めて、礼を言わせててくれ、比企谷くん」

「ちよ、いいですつてそんなの」

一色の父親が深々と頭を下げる。正直なところ、何故こんなにもありがたがられているのかが良く分からん以上、反応に困るから是非とも止めさせていただきたい。

「いいえ、私からも言わせて下さい。比企谷くん、あなたのおかげで、私達は取り返しのつかない間違いを犯さずにすみました。本当に……本当に、ありがとう」

「……お父さん、お母さん」

流石に、二人の態度から何か大きなことがあったのだと推測できる。一色に関わることだということも、それに俺が関係しているということも。

「……お父さん、お母さん。せんぱいには私から言うから。少し、席を外してくれない？小町ちゃんと瀬谷さんも、悪いけどお願ひ」

「いろは……」

「……ええ、そうね。行きましょう、あなた」

「分かつたわ。荷物、ここに置いとくね、いろはちゃん」

「……じゃ、小町は飲み物でも買つてきますね。お兄ちゃん、いろはさんに失礼なことしちゃ駄目だよ?」

「するか、さっさと行つて、い」

瀬谷さんと一色の両親が出ていつた後、扉から半分顔を出す小町に財布を放る。それを受け取つた小町はそのまま部屋から出ていった。

部屋には、俺と一色だけになつた。

少し、気まずい空気が漂う。

「……その、久しぶりですね、せんぱい」

「……ああ、俺が退院してからだから、丁度一週間ぶりだな」

「……ですね」

会話が途切れる。俺は、こんなにも口下手だったのだろうか。一色と話すことさえ、こんなに下手くそだつただろうか。……いや、違う。今の俺は、一色だから、上手く話せないんだ。

「……すまん、一色」

「……ふえ?」

「いや、その……見舞いに来れなかつたこと、とか。諸々すまん」

「……ふつ」

一色が声を殺して笑い始めた。余程面白いことでもあつたのだろうか。俺か?……俺だな。

「安静にするための自宅療養だから来れない。せんぱいが言つてたことですよ?」

「まあ、そなんだが……」

「それに、そうだとしても私が勝手に拗ねてるだけじゃないですか。何でせんぱいが謝つてるんですか。らしくないですよ」

「う……」

俺らしくない、確かにそうだ。以前の俺なら罪悪感など微塵も感じなかつただろう。しかし、今の俺が罪悪感を感じていることも事実だ。まあ、詰まるところ。

「……俺も、変わつてきてるのかもな」

俺の意識が、考え方が。一色、お前のおかげで、な。

「変わつてませんよ、せんぱいは。少なくとも、私にとつては。ひねく
れてて、ぶつきらぼうで、それでいてちゃんと話を聞いてくれて、人
のことしつかり考えてくれて……私のことを助けてくれた、優しい
優しいせんぱいのままです」

「……そんなんじやねえよ、俺は」

俺は、そんな大層なやつじやない。一色が助かつたってのも、それ
は一色本人が強かつたからだ。俺は、問題に石を投じただけだ。石を
投げ入れて、問題を壊しただけにすぎない。解決して、立ち上がり、
立ち直つたのは、全部一色の力だ。

だが、一色は首を横に振つてそれを否定する。

「そういう人です、せんぱいは。さつきも、お母さん達が言つてたで
しょ？ 間違いを犯さずにすみましたつて。あれだつて、せんぱいのお
かげです」

そういえば言つていた。しかし、今日初めて出会つた俺が一色の両
親に何かできるわけも無い。俺には、何の心当たりも無いのだから。
そんな俺をよそに、一色は呟くように話し出す。

「せんぱい、言つてくれましたよね。親に遠慮するなつて、信じてや
れつて。……せんぱいが退院してから、両親と話したんですよ。思つ
てたこと、全部ぶちまけちやいました。私のことで喧嘩なんてしない
でつて、私が話してればこうはならなかつたつて、二人のこと、信じ
られなくつてごめんなさいつて。……三人でわんわん泣いちゃいま
したよ」

確かに言つた。言つたことすら忘れているほどに、俺が何気なく
言つたことから、こいつはこいつなりの行動に移していくんだな。
「ちゃんと三人で話し合つて、ちゃんとこれからのことを考え、色々
決めたんです。……せんぱい、私、転校します」

「……転校、この時期にか？」

一色は確か中三のはずだ。受験なんかで忙しくなるこの時期に転
校するのは、普通は得策とは言い難い。……が、そう話す一色の目は、
真剣そのものだった。

「はい。別に逃げる訳じやないですよ？あのままあの学校にいる方が

色々大変だろうし、何より両親に心配かけちゃいますし。だから、転校します。両親にも納得してもらつて、転校先も探しで貰いました。

いわゆる、戦略的撤退つてやつです」

……やっぱり、凄い。俺のちっぽけな助言程度で、こいつは先のことを考え、両親との蟠りも、自身を取り巻いていた環境も、全て何かしちまいやがった。

「偽物の仮面を被つていた、臆病な私がここまで変われたのは、せんぱいのおかげなんですよ？」

「一色……」

なおも、一色は俺のおかげだと言つてくれる。なのに、俺の理性は絶えず、「そんなことはない、その感情は偽物だ」と叫んでいる。しかし、その一方で、一色のまつすぐな言葉にどうしようもない喜びを感じる俺もいる。これだけは、この感情だけは誤魔化しようの無い『本物』だ。

なら、今だけは。

「……一色、これ」

「これは……？」

俺は鞄の中から、簡素なデザインに気持ち程度のラッピングが施された紙袋を取り出した。それを、一色に手渡す。

「……あれから、俺も俺なりに考えたんだよ。これからのこと……お前のことに、俺達のこと」

「私達のことを……？」

「……悪いが、返事はまだできない。やっぱり、俺はまだまだ変わらないから。臆病なままだから、お前だとしても信じられないんだ」

「……」

「……でも、だな。これは、俺がお前に、その……買って、いや、渡したいって思つたんだよ……俺の本心からな」

「……せんぱい、開けてみても、いいですか……？」

「お、おう……」

俺の返事を聞くや否や、すぐさま一色が包装を解いていく。

「せんぱい、これ……」

包装を解かれた箱から一色が取り出したのは、所謂アームウォーマーと呼ばれるものだ。白と黒のコントラストになつてゐる質素なものだが、そのアームウォーマーを持ったまま、一色は果然としている。

「いや、まあ……何だ。腕が回復しても、また前みたいに急に痛み出したりしないとも限らんし、それならサポーターとしてだけじゃなくお洒落的にもいいかと思つてな。それならいつでも使えるし……退院祝いってことで、な」

「……せんぱいが選んだんですか？」

「いや、まあそりゃだが。まあ気に入らんかつたら別に使わなくても

……」

「せんぱい」

途端に恥ずかしくなつて顔を背ける。しかし、一色に名前を呼ばれて一色の方を向くと。

一色は、アームウォーマーを胸に抱いて、泣いていた。

「お、おい一色……」

「……怖かったです。ずっと、せんぱいが退院してからずっと、怖かつたんです。あんなこと言つて、せんぱいを困らせたんじやないかって、せんぱいにうざがられたんじやないかって。せんぱいに、嫌われたんじゃないかって」

「……そんなこと」

「お見舞いにも来てくれなかつたし、来ないの分かつても心配で、不安で、怖くて……せんぱいの本物になるなんて偉うこと言つて、

「私、弱くて……」

一色は、その小さな体を震わせて泣いていた。

俺のせいだ、泣いていた。

「だから、今日来てくれた時、凄く嬉しかつたんです。最後だとしても、それだけでも、嬉しかつたんです。本当に、本当に……でも、なに……こんなの貰つちゃつたら、我慢できないじゃないですかああ

……」

目の前で大粒の涙を流しながら、ただ俺のことを想つて、一色は泣いていた。その様子は、本当に、心の底から愛しいと、そう思えた。「……好きです。本当に好きで好きで、どうしようもないんです。せんぱいとお話しするのが楽しかったです。せんぱいに話を聞いてもらえて嬉しかったんです。いつもせんぱいのこと考えちゃって、その度にどうしようもなく嬉しくて、にやけちゃつて、でも会えなかつたら寂しくて、怖くて、辛くて、苦しくて、気持ち悪いところもあるし、矛盾だらけのかつこつけで、本当に意味分からぬ時とかあつたけど、優しくてひねくれたせんぱいと一緒にいる時間が、とても心地よくて……でも、これからは、退院しちゃつたら、私は中学生でせんぱいは高校生で、会えなくなつちやつて……だから……だから……」

一色は今にも溢れてしまいそうなほどの涙を溜め、俺にまつすぐと、心の内を吐き出した。

「ずっとずっと、せんぱいと一緒にいたいです。これからも、ずっと。
退院して、これで終わりなんて、そんなの嫌ですよおおお……」

文字通り、動けなかつた。心に響く言葉、なんてドラマみたいなことあるわけないと、ついさつきまでの俺は本気で信じていた。

しかし、今の俺は、それが実際にあることを身をもつて知つてしまつた。何故、俺は一色を特別視していたのか、何故、一色と上手く話せなくなつていたのか。全部、全部思い知らされた。

俺も、終わらせたくなかつたんだ。一色との、この関係を。

悪意無く、義務でもなく俺に話しかけて、接してもらえたのは、いつ

たいいつぶりだろうか。いつの間にか、俺は無意識に人を避けていたんだ。深く関わって、傷つきたくない。そう思っていたが、それは正解じゃなかつた。

「……俺、も」

俺は。

「……たくない」

怖かつた。

「……俺も、お前を、一色を……失いたくなかった」

俺は怖かつたんだ。一色を失うことが。

「俺は、一色、いろはを……失いたく、なかつたんだ」
人を避けていたのは、傷つきたくないからだけじゃない。これ以上、側から離れていくてほしくなかつたんだ。だから、心に鍵をかけて、壁を作つて、誰も入つてこれないようになつた。誰も入れないようになつていたんだ。

それが、俺の本質。

傷つきたくない、失いたくなくて、だから全てを拒絶して、一人達観した気になつて、強がつて、人一倍他人を求めて縮こまつていた、弱く醜い人間。

そんな比企谷八幡の意地と、くだらない虚榮心のせいで、目の前の少女は涙を流しているのだ。そして、この少女に、応えたいと思つている俺がいる。

ならば、俺も決めなければいけない。

いつか、では駄目なんだ。

「だから……俺に、一度だけでいい。いろは……俺に、お前を信じさせて、くれ、ないか……？」

もう後悔したくない。失いたくない。醜くても、傷ついてでも、初めて全てを投げ出してでも手に入れたいと思えた『本物^も』に、初めて手が届くかも知れないんだ。一生分の恥をかいともいい、どれだけ笑われたつて構わない。

比企谷八幡という、俺自身の『生き方^み^ち』を変えるなら、今しかないんだ。

「…………せんぱい、それって」

「…………まだ、俺の気持ちが本物なのかは分からない。けど、その、お前を信じたいと思つてる俺がいるのも、事実……だ。だから……」

「まずは、『友達』として、から、頼む、一色。俺に、お前を信じる時間を使、チャンスをくれ」

一色に、頭を下げる。今、この気持ちのまま返事を返すのは簡単だ。けど、安易に感情で突つ走つてしまふのは、俺自身が『本物』とは言えないし、本気で向き合つてくれている一色に失礼だ。だから、俺は変わりたい。

俺自身、ちゃんと一色に向き合えるように。

「変わるチャンスをくれ、一色」

静寂が訪れる。俺以外誰もいなかのような錯覚に陥りかける。しかし、何か擦れるような音がして、その静寂はあつさりと破られた。

「…………せんぱい、顔を上げてください」

一色にそう言われ、顔を上げると。

「一色……」

「…どうです？似合いますか？」

俺が渡したアームウォーマーを身に付けた一色が、笑顔を浮かべていた。

「今は、せんぱいのその言葉だけで十分です。これがあれば、いつでも

せんぱいを思い出せますから。離れていても寂しくありません」

「…俺を思い出すとか、何かエロいな」

「もー、こんな時に茶化さないでくださいよう」

「わりい」

自然と、本当に自然に、俺と一色に笑みが戻った。取り繕わず、ありのままで笑うのがこんなに気持ちがいいことだとは、これまで生きてきて知らなかつた。

やつぱり、俺はこの空気が気に入つていてるんだ。

「……まあ、何だ。今生の別れつて訳でもないし、会おうと思えばいつでも会えるだろ。小町もお前のこと気に入つてるみたいだし、いつでも会いに来たらいい」

「そうですね。そんな簡単なことも忘れてました」

「……ま、俺も忘れてたし、な」

「恋は盲目ですねえ」

「はいはい、あざといあざとい」

今までだつて、俺は一色に色んなことを期待してきた。同じように、一色は俺に純粹な期待をぶつけてくれる。期待なんて、自己陶酔の押し付けだと思っていたが、今の俺なら信じられる。

例えまた裏切られてもいい。

まだまだ他人を借りなきや言いたいことすら伝えられないひねくれた俺だが、一色と一緒になら、俺は変われる。何度もだつて信じられる。そう、信じたい。

「絶対に追い付いて、せんぱいに認めさせてやります」

「おう。期待して待つてるよ」

これからは、一方的に期待をかけるんじゃない。俺も、一色の期待に応えよう。俺自身、応えたい。

病院という二人の小さな世界は終わり、それぞれの日常を歩き出す。

それでも、俺と一色の世界は終わらない。なぜなら、まだ始まつてすらないのだから。

「これからも、よろしくです。せんぱい」

「（）ちらこそだ、一色」

『ただの相部屋同士』の関係は終わり、『友達』として、『あざとい後輩とひねくれた先輩』として、新しい世界を歩き出すのだから。

キャラ設定 病院編

キャラ設定

比企谷八幡（ひきがや はちまん）

年齢：十五歳

誕生日：八月八日

血液型：A型

在籍：千葉市立総武高校一年生

座右の銘：「押してだめなら諦めろ、それが嫌なら醜くても足搔け」主人公。そそそこ整つた顔に一本だけ飛び出た癖つ毛、そしてそれら全てを台無しにするほどの目が特徴。その目はつり上がつた細目であり、その見た目の悪さから不等な評価を下されることも多く、「目が腐っている」とさえ言われる。中学生活の暗黒時代を繰り返さないため、努力の末に総武高校に合格するも、入学式の張りきりが空回りし、登校中にリードが外れた見知らぬ女性の飼い犬を庇つて車に轢かれ、全治一ヶ月の怪我を負つて入院する。

入院先の病院でいろはと出会い、相部屋となる。最初こそ戸惑つていたものの、慣れると互いに軽口を叩けるまでの間柄になつた。

長い間友達がおらず、ぼつちライフを過ごしてきた故に人の感情の変化に機敏で、心を読むように行動を決める。また、人の頼み事を聞き入れる際、最も効率のいい方法を模索し、そのためなら自身が傷つくことを厭わない自己犠牲の気がある（本人は否定している）。

過去には人並みに他人と関わろうとしていたが、ぼつち故に距離感や接し方が分からず、大体はキモがられたり黒歴史と化している。この過去故に他人との交流を半ば諦めている節があり、「何でも気兼ねなく分かり合える本物」が欲しいと言いつつ「とっくに諦めている」と発言するなど思考や性格そのものが歪んでしまつている。

家族からも不等な扱いを受け続けていたこともあり、生半可なことでは善意も惡意も心に響かず、時に事務的とも言える返しをすることもあるが、決して相手を無下にすることはない。また、女性のスキンシップ等には赤面するなど、完全に反応しないわけではない。

裏を読みすぎる性格故に人の言葉や好意を素直に受けとることができず、大抵のことに対しても否定的な意見を返す。そのため、いろはから告白紛いのことをされても、その真意は理解しているものの、返事をできないでいる。

プリティでキュアツキュアな某少女アニメの大ファンで、日曜日朝は毎回涙を流しながら視聴している。

一色いろは（いつしき いろは）

年齢：十四歳

誕生日：四月十六日

血液型：A型

在籍：千葉県立城山中学三年じょうやま

座右の銘：『本物』になる

今昨ヒロイン。栗色の髪と全体的に小柄で小動物のような愛らしい見た目故に、元は中学のトップカーストの一員だった。夏休み前にやつて来た転校生の大場大成から告白を受け、シチュエーション的に断れず、なし崩し的に付き合い始めるが、それが原因で女子生徒からの嫉妬により嫌がらせを受け始める。最初は特に気にしていなかったものの、大場の単独行動により更に悪化した虐めを受け続けていた。親にも相談できずに自衛とも取れる逃避の末、三年の始業式の日に嘗て友達だった女生徒に踊り場から背中を押され転落、両腕にひびが入り一週間意識不明になるほどの大怪我を負い、入院する。

入院先で八幡と出会う。異性との相部屋ということで最初は警戒していたものの、一週間も経つと距離感を感じなくなるほどフランクな態度となつた。また、八幡のことを「せんぱい」と呼ぶ。（第三者の前では「比企谷先輩」）

上述の事件により、同級生や男性に拒否反応を示していくが、八幡の立てた作戦により大場と決別し、トラウマを克服した。

八幡が退院する日が近づくと露骨に残念がるなど、相変わらず距離感は近い。

名前をもじつて「いろはす」のあだ名が定着しているのは原作通りだが、名付け親は八幡となつていて（飲み物を買う時、いろはに「い・

ろ・は・す天然水」を渡したことから)。

手に負担をかけないようにと八幡が贈ったサポートターが宝物で、風呂と寝るとき以外は常に身に付けている。

中学の事件を発端に、家族内に亀裂が入りかけたが、今は両親と昔以上に仲睦まじい関係となっている。

八幡に対してのマシンガンお断り（八幡命名）が特技だが、いろはが八幡への好意を自覚してからはもはや断つておらず受け入れている節も見られ、また八幡は大体聞いていない。

瀬谷沙也加（せや さやか）

年齢：二十二歳

誕生日：九月九日

血液型：AB型

在籍：千葉総合病院勤務 看護士

座右の銘：「成せばなる、成さねばならぬ、何事も」

オリキヤラ。脱色した金髪の、さっぱりした物言いが特徴の千葉総合病院の新人看護師。八幡の担当となり、後にいろはの担当も兼ねる。二人のことを姉のような立場から見ており、時々助言めいたことを口にすることがある。

ショタコンの気があり、夜な夜な少年患者の寝顔を見て回る趣味がある。下に五人兄弟がいるため非常に面倒見が良く、逆に年寄り臭い発言をすることがある。

悩みは貧乳であることと、男らしい性格面から中々彼氏ができるないこと。

大場大成（おおば たいせい）

年齢：十四歳

誕生日：六月二十六日

血液型：A型

在籍：千葉県立城山中学三年

座右の銘：「One for All, All for One（一

人は皆のために、皆は一人のために）」

オリキヤラ。二年の時にいろはのいる中学に転校してきた。何で

もそつなくこなす天才気質で、あつという間にクラスのカーストに割り込んだ。転校してきた時からいろはに一目惚れしており、夏休みにクラスメートの前で大々的に告白した。晴れでいろはと付き合えたものの、それが原因でいろはの虐めが発生することとなる。また、事態をしつたことにより下手に犯人を探そうとした結果、事態がより悪化し、遂にいろはの大怪我に繋がってしまう。

顔も良く、異性のみならず同性にまで好かれるいかにもなトップカーストだが、それ故自身が悪意に晒されたことがなく、本当の意味で人の悪意を感じ取れない。また、「性善説」を信じており、「話せば分かる」を用いる典型的な話し合いタイプである。

八幡と話したことで初めて話し合いが通用せず、いろはにも拒絶されたことで今までの信条が揺らぎかける。

それぞれの日常編

第八話 漸く始まつた高校生活は、されど変わらず。

「お兄ちゃん、大丈夫？ちゃんとハンカチとティッシュ持つた？足痛くない？」

「しつこいわ、小町。大丈夫だつての」

週明けの朝。時計の短針が七を指そうかという時間に妹、小町がここまで甲斐甲斐しく世話を妬いてくるのはとある理由がある。

「だつて今日からお兄ちゃんの高校生活が始まるんだよ！第一印象は良くしていかなきや！」

「あの、小町ちゃん。入学初日から行つてない時点で第一印象も何も無いからね？既に出遅れてるからね？」

まあ、ぶつちやけ俺の高校初登校日な訳だが。元々学校に行つてない上に初登校日が五月、もうグループはあらかた出来上がつてゐるどうし、第一印象も何も無い。中学の時と同じ、ボツチ生活が始まるだけだ。

そんな兄の心境は露知らず、当の本人以上にせわしなく動く小町。「まあそなうなんだけさ。ただできえ印象を悪くとられがちなお兄ちゃんなんだから、できる限りはやつといて損はないでしょ」

「そんだけやつても精々プラマイゼロだけどな」

「何言つてんのお兄ちゃん」

ようやく納得がいつたらしい小町は、その発展途中の胸を反らしながら得意気に言つた。

「これでようやくマイナス十くらいだよ」

「……」

どうやら俺は、精一杯着飾つてもマイナスの域を出ないらしい。あれ？晴れてるのに雨が降つてるよ……

「まあ冗談はこれくらいにして」

「冗談？小町ちゃん、どこが冗談？どこからが冗談？」

「そんなことよりも！」

妹から兄への罵倒はそんなことですかそうですか。

「とにかく！もう事故に遭つたりなんかしないように、早く、安全に学校に行くこと！いい？」

「……あい」

流石にもう心配をかけるわけにもいかない。それに、そうそう車に轢かれてなどたまつたもんじやない。

……フラグじやないよ？

…まあ、流石にもう轢かれるこどもなく学校に着くことに成功した。流石に今の足だと自転車は中々キツかつたが、まあこげないこともない。これからも自転車通は確定だな。

「とりあえず、まずは職員室に行かなきやだつけか……」

まだだいぶ空いている駐輪場の端に自転車を止め、そのまま職員室を目指す。本来初日に受けけるはずだったオリエンテーション的内容を含む、諸々の説明を受けなければならぬらしい。まだ早い時間だからか、あまり人も多くない。精々朝練をしている部活動のやつらくらいのものだ。

……部活、か。

「…すみません、比企谷です」

「ああ、待っていたよ。そこに座つてくれ」

考え方をしていたが、いつの間にか着いていた職員室の扉を叩き、中へと招かれる。そして、担任の教師だという男性から、本来初日に受けとるはずだった資料や教科書を受け取り、そのまま細かい説明を受ける。

「——と、説明は以上だ。何か分からることはあるかい？」

「…いや、大体分かりました。……あ、一つだけ、いいですか？」

「何だね？」

「いや……その、部活とかつて強制だつたりするんすか？」

「…いや、強制ではないよ。入りたくなれば入らなくともいい。それだけかい？」

「そつすか……。ありがとうございます」

「いや、いいよ。さて、そろそろ時間だ。君の教室に案内しよう」
話を聞いている間に結構な時間が経過していたらしい。部屋の外からは生徒達のものであろう喧騒が徐々に聞こえ始めていた。

『変わるチャンスをくれ』

多分、俺の高校生活は以前と何も変わらない。それでも、ああ言った手前、俺が変わる努力位はしたい。

「……きて、行くか」

前言撤回していいですか……

「えー、入院していくて今日が初の登校になる比企谷くんだ。分からな
いことも多いだろうから、みんなでサポートしてあげるよう」
黒板に書かれた名前を背に、自己紹介という名目で教卓の横に立つ
ているわけだが。

「「…………」「」

痛い！クラス中の視線が痛いよ！そりや、こんな時期まで学校に来
ずに入院してたとか色々思うこともあると思うけどね？殆ど珍獣扱
いじやね？女だらけの教室に放り込まれた某主人公の気持ちが今な
ら分かる気がする。状況全然違うけど。それでも、今までヒツキーで
通してきた俺からすれば十分即死クラスの眼光な訳で。何、魔貫光殺
砲でも出しちゃうの？

「じゃあ、比企谷くんからも何か一言」

そういうのいいんで早く座らせてください……とは口に出せない
ので、クラス中を軽く見渡す。興味ありげにこっちを見るやつ、興味
無さそうにだらけてるやつ、色々いるが、元々俺は人気者でもトップ
カーストでも無い。故に、いつも通りでいい。普通に、普通に……
「ひ、比企谷八幡です。まあ、よろしくお願ひしましゅ」

「「…………」「」

……死にたい。

開始早々挨拶をトチるという大失態をやらかしてしまったわけだ

が、特に問題はなかつた。別段誰も俺のことを気にしてなかつたし、小町にも言つた通り、既にグループが出来上がつてゐるこの時期に、俺の入る余地などあるわけがない。というか、別に無理に入ろうとも思わないし。

というわけで、ぼつち確定の俺は休み時間と数学は机に突つ伏して寝ていよう……

「あ、あの……」

……寝よう、と思つていたのだが、何とも珍しいことに声をかけられてしまつた。いやいや、多分他の誰かに声をかけたんだ。そうに違いない。ここで反応したら、数ある八幡黒歴史の一つ、「え、あんたに話しかけたんじやないんですけど自過剰乙」が目覚めてしまう。ここは無視を――

とんとん。

……肩を叩かれてしまつたら無視できないじゃないですかー。仕方なく声のする方に目を向けると、茶髪を可愛らしく纏めたクラスメートが、右手を半分あげた状態で固まつていた。その髪型もさることながら、発育良くとても女性らしさを象徴している二つの果実が素晴らしいと思いますはい。

……何か寒氣がした。ハチマンワルクナイヨ、ホントダヨ？

「……何だ？」

「あ、いや、その……」

まさか声をかけられるなどと思つてもみなかつたので、かなりぶつきらぼうな返答になつてしまつた。女子生徒も、気圧されたのか所帯無さげにおろおろとしている。

そして。

「……や、やつはろお～……」

謎の呪文を唱えた。……え、何？やつは……何？

「…何だ、それ。死の呪文か？それともあれか？ゾンビは光に消えろ的な」

「違うし！ザラキでも二フランでも無いし！」

「せめてザキじやね？被害拡大してんぞ」

ついついゲームネタで返答してしまったが、どうやら通じたようだ。つうか、ノリいいな、こいつ。

「……んで、何か用か？ 悪いが、転校生みたいに注目を浴びる要素は何もないんだわ」

「え？いや、そういうんじゃなくて……」

「何だよ、歯切れ悪いな」

「う、ごめん。…その、あ、あの時は——」

「由衣——！ 何やつてんのー？」

女子生徒が何かを言おうとした時、クラスの奥の方からこれまた女子A（名前は知らん）が女子生徒の名前らしきものを呼んでいた。成る程、こいつもトップカーストの一人だったか。名前を呼ばれたそいつは、何故か俺と女子Aを交互に見ながらあわあわしていた。

「……多分、お前呼ばれてるぞ。いいのか？ あっち行かなくて」

「え、ああうん。ごめん、また後で……」

「へいへい」

そいつが女子Aのところに行つたのを見届けて、机に突つ伏す。あー……疲れた。

（変わるのって、やっぱ疲れるわ）

家族以外の女子と話したのなんていつぶりだ？ 中学の時のあいつ以来……いや、少し前にあいつがいたな。

『せんぱい』

ふと、脳裏によぎつたそいつの笑顔を思い出し、伏せた顔が自然と緩んでいるのを自覚する。少し前の俺なら、とっくに諦め、邪険にして追いかけていただろう。昔を考えれば、ちゃんと話が続いただけましになつた方だと思う。

……まあ、何だ。高校生活は以前と対して変わらないけど。

変わらうとするのも、たまには悪くない。

「今日の体育はテニスだ。難しいことは抜きにして、二人一組で打ち合つてみろ」

午後一発目の体育はテニスだ。しかも、悪魔の呪文「フタリヒトクミ」を唱えるおまけ付き。ちよいと先生よ……実質今日が初登校の俺と一緒に打ち合う友達なんかいないです！中学でもいなかつたです！（自虐）

しゃあねえ、壁打ちでもしとくか……

「あいや待たれよ、そこの御仁！」

ボールとラケットを手に、レツツ壁打ち……というタイミングで、誰かの声が聞こえた。まあ、俺を呼び止めるわけ無いし、別のやつなんだろう。無視無視。

「え？あ、いや、待たれよ！」

しつこいな、相手のやつ待つてやれよ。待たれよ！って言つてるじゃん。

「ちょ、待つて！無視はやめて！そこの御仁！えと、壁打ちしようとしてるそこの者！」

「……俺？」

丁度壁打ちのフォームに入つたところで動きを止めた。軽く回りを見渡しても、俺以外に壁打ちをしようとしてるやつはいない。ん、俺のことだな。

「……で、何？その前にあんた誰？」

声のする方を向くと、逆立つた髪に眼鏡、でっぷりとした体を隠す体操服にコート……コート？を羽織つた、中年風のやつが立つていた。

「よくぞ聞いてくれた！我こそは、かの名高い剣豪將軍、足利義輝さい もくざよしてるの魂あしかが よじてるを受け継ぎし者、その名を材木座義輝と申す！」

「……」

「無視はやめてえ!」

ここまで会話で分かつた。こいつは危ないやつだ。関わらないに限る。

「何だ、どうかしたのか」

と、相変わらず材木座とかいうやつが騒ぎ立てたせいで先生がこつちによつてきちゃつたよ。せつかく秘技・「空気^ス_テと同化する八幡^{ヒツキ}」で存在感を消してたのに。

「何だ材木座、またお前か……ん？お前は、確か比企谷だつたか？」

「……はい」

「そうか、お前は今日が初だつたな。すまん、うつかりしていた。普段はいつも材木座が一人余るんだが、丁度いい。比企谷、今日は材木座と組んでやってくれ」

「げえ……」

教師の粋な計らい、というやつだろうか。まあ、俺と材木座とかいうやつ以外はみんなペアを作つてる以上、余り物が纏められるのはしようがないことだ。

「…ふ、ふむ！仕方あるまい！今日はこの剣豪将軍、材木座義輝が貴殿に剣の極意を伝授してやろう！」

…しようがない、ことなんだが……ぶつちやけ面倒臭い。突つ込みどころが多すぎて。お前から教えてもらわなくともテニス位できるし、そもそも剣じやない。ラケットだ。

「……まあいいや。適当にラリーでもしとくぞ……えと、材木座？」

「そう言えば、まだ貴殿の名を聞いておらなんだな。貴殿、名を何と申す！」

聞けよ、話。

「ああ…比企谷だよ。比企谷八幡」

「そうか、では八幡！我の華麗なる剣捌き、今こそお目にかけようぞ！」

「うるせえ、見せるならラケット捌きにしろよ。ざ…もく…木材屋？」

「ぎやふん!？」

……分かった、こいつ危ないやつじゃない。痛いやつだ。所謂、「中二病」的な。

痛いやつではあるが……まあ、悪いやつでは無いか。

「おら、さつさとやるぞ、材木座」

「……はつ！う、うむ！我の華麗なる剣——」

「それはもういい」

うるさくても、こういう素を見せてぶつかってくるようなやつは、まあ嫌いじやない。

「ゆくぞ、八幡神よ！」

「何だよ、八幡神つて」

……うるさいけど、な。

「ただいまー」

「あ、お兄ちゃんお帰りー」

玄関で靴を脱いでいると、小町がとてとてと歩いてくる。

「お兄ちゃんどうだった？初めての高校生活は」

「どうもこうもねえよ。思つた通りのぼつち生活が始まつただけだ」

昔なら現実に悲観してやさぐれでもしていたかも知れないが、今は中学と同じぼつちでも、それほど悪くないと感じている。

やつぱ、あいつのおかげかね。

「でも、まあ話すやつくらいはできたぞ」

「え、本当に!?」

「ああ」

中二病だけど。

「そつかー。友達なんて幻想だのまやかしだの言つてたお兄ちゃんが……変わるもんだねえ」

「うつせ、友達じやねえっての。……でもま、変わるつて決めたからな」

なら、変わらしかないだろうよ。変わりたいと感じてる俺がいるんだから。

「ま、俺の話はともかく、だ。お前はどうだつたんだよ」

「あ、小町の話？ふふーん、聞きたい？ねえ聞きたい？」

「いや別に」

「お兄ちゃん冷たーい！小町は話したくてもうウズウズしてるんだよ！」

「分かつた分かつた。飯食いながら聞いてやるよ」

そう言つて玄関から移動し、既にあらかた準備のできていた小町お手製の料理を並べ、二人で晩飯を食べる。

「いただきます」

「いただきまーす。それでね、お兄ちゃん。今日ね——」

俺の漸く始まつた高校生活は、中学以前と何も変わらない。やはり、俺の学校生活はどこか間違つていて、それが当たり前なのだろう。だけど、それでもいいと思えているのは。

(やつぱ、あいつの影響なんだろうな)

無性に懐かしさを覚えるあいつのこと浮かべながら、俺は小町の声に耳を傾け続けた。

第九話 リスタートした中学生活は、中々悪くない。

「えへへえ……」

退院し、久しぶりの家のベッドに寝転がった私は、ずっとある一点に集中していた。

「えへ、えへへえ……」

それを見ているだけで、笑みが抑えられない。どうしようもなくにやけている。

視線の先には、自分の両腕一一いや、正確には、その腕に着けているアームウォーマーなのだが。これは、せんぱいが私にくれた大切なものです。

せんぱいが、私にくれたもの。

せんぱいが、私に。

「～～～～！」

横たわったベッドに顔を埋め、枕を右手でバシバシと叩き続ける。何か痺れるような痛みがするけど、それすらどうでもいい。

（せんぱいが、私に…私にくれたんだよね……）

まだ真新しいアームウォーマーは、せんぱいの臭いがするなんてことは無いけれど。私にそんな変態的趣味も無いけれど。その中には、あの不器用でひねくれたせんぱいの精一杯の想いがあるような気がして。

「……えへ」

それを考えると、自然に笑みが浮かんできてしまう。あの妙にひねくれたせんぱいが、私のために悩みながらこれを選んでくれていたのだと想像するだけで、ギヤップに悶えてしまう。

せんぱいが退院してしまったあの日以来、私の頭は常にせんぱいのことで埋め尽くされていた。朝起きれば無意識に「おはようございます」と言い、ご飯を食べれば「味気ないです」と愚痴を漏らし、寝る時に「お休みなさい」と呟いてしまっていた。今思い出してもかなり重症だ。どれだけ瀬谷さんに笑われたか、考えるだけで恥ずかしそぎ

る。

せんぱいのことを考へると、胸が暖かくなる。同時に、締め付けられるように苦しくなる。ちくちくと針で突つつかれるような痛みを感じるときもある。けれど、その苦しさが、痛みが、何だか心地良い感覚でもあり。

こんな感覚を、私は生まれてこの方知らない。

「……これが、『好き』ってことなのかな…」

好き。

…うん。私は、せんぱいが好き。

目が淀んでるせんぱいが好き。ひねくれてるせんぱいが好き。屁理屈でそっぽを向くせんぱいが好き。口ばっかりで、本当は寂しそうなせんぱいが好き。自分大好きなんて言いながら、人のために必死になれるせんぱいが好き。あの日、私の話を受け止めてくれて、私を助けてくれたせんぱいが好き。

せんぱいの全部が、私は大好き。

「そう、なんだよね……」

私は、せんぱいに恋してるんだ。

(でも……)

例え、私がどれだけせんぱいを好きでも、せんぱいは私を拒絶する。私が知るよりももつと辛くて苦しい過去が、せんぱいにはあるはずで、それが原因で、せんぱいは他人を信じきれなくなっていた。信じて、裏切られて、それで傷つくくらいなら、初めから信じなければいい。全てをはね除ければいい。せんぱいのその考えは、まだ変わつてはいない。

『俺に、お前を信じるチャンスをくれ』

なのに、せんぱいは私に、チャンスをくれと言った。私を信じるチャンスを、せんぱいが変わるチャンスをくれと、せんぱいはそう言つてくれた。

私のために、せんぱいは変わろうとしてくれている。例え自惚れでも、思い上がりでも、そう考へると、どうしようもなく嬉しかった。

「でも、流石にこの顔は無いよね……」

部屋の真ん中に飾つてある鏡で顔を確認する。どうにも締まりの無い顔をしていた。

キリツとした表情を作つてみる。…ふむ、やつぱりそこそこ顔が良いから似合うな、私。

『似合つてるぞ、いろは』
ニヘラツ。

「はっ!?

ダメダメ! ついついせんぱいのことを考えてしまつた。整つた顔立ちが、一瞬で締まりの無い顔になつてしまつた。

「……これは他の人には見せられないかも」

妙に締まりの無い顔をぐにぐにと弄りながら、全然元に戻つてくれない顔に妙な焦燥感を覚える。こんな緩みきつた顔、とてもせんぱいには見せられない。ましてや、他の人になんて……
(でも……)

『笑つてりや可愛いな、お前』

なんて……

せんぱいなら、お世辞でも誉めてくれないかな。いつもみたいに、せんぱいの言う「あざとい」感じで言つたりしたら…えつと……

「…せんぱーい。私、せんぱいと一緒にいるだけで、とっても幸せでーーー」

「いろはー、何騒いでるの? そろそろご飯だから降りてーーー」

不意に開け放たれる自室のドア。

私の視界には、鏡に反射して映るお母さん。

お母さんの視界には、顔をぐにぐにと弄りながら、鏡に映る自分に所謂ぶりツ子ポーズで話しかけている緩みきつた顔の、私。

まるで時が止まつたかのような静寂。

「……早く降りてきなさいね」

先に耐えられなくなつたのは、お母さんの方だつた。

「ちよ、待つて! 待つてお母さん! 誤解だから!」

「い、いいのよいろは。いろはもお年頃だもんね。親に言えないような趣味の一つもあるわよね」

「どんな誤解受けてるの私!?とにかく聞いて！ちょ、お母さん！」

「お母さん先に降りとくからね。安心して、お父さんには黙つててあげるから」

「いやそりゃなくつて！いや黙つてて欲しいけど！お母さん！」
この後、誤解を解くのに小一時間。またベッドで悶えたい気分になつた。…さつきとは別の意味で。せんぱい風に言えば、黒歴史つてやつだろうか。

（……せんぱいとお揃いかあ…）

死ぬほど恥ずかしかつたはずなのに、本氣で消えてしまいたいと思つたはずなのに。せんぱいと同じだ、なんて考えてしまつて。

「…えへ」

嬉しいと感じている時点で、私はかなりヤバいんじゃないかと思った。割りと本氣で。

「いろは、大丈夫？ちゃんとハンカチ持つた？ティッシュは？」
「……お母さん、大丈夫だつてば。ちゃんと持つてる」

月曜日、朝。緊急でお父さんはもう仕事に行つたけど、いつもより早い時間に起きて、私よりもせわしなく動いているお母さんをよそ

に、私は新しい制服に袖を通す。

(……これが、私の新しい制服…)

飾らない白の生地にアクセントで少量の色が乗せられた、所謂セーラー服というやつ。私が、これから通うことになる中学の制服。

(あー…どうしよ。やっぱり緊張するなあ)

せんぱいには大丈夫なんて強がつてみたけれど、やっぱり緊張しない訳じやない。不安はあるし、何なら今すぐせんぱいに会いたくなるまであります。

それでも、不思議と怖くはない。

(私も、変わるつて決めたから)

転校理由がいじめ、なんてトラウマになつてもおかしくないし、新しい学校でも行きたくなるかもとは思つたけれど、不思議と怖くはならなかつたのは…多分、せんぱいのおかげ。

いじめから助けてくれた年上の異性。これだけなら、その異性はとても強く、かつこいいと思われるだろう。白馬の王子様も真っ青だ。だけど、せんぱいは違う。どこまでも臆病で、どこまでもカッコ悪い。だからこそ、どこまでも全力で手を差し伸べてくれる。どこまでも不器用なその手を、掴ませてくれる。

私は、そんなせんぱいの『本物』になると誓つた。そのためには、この程度で怖がつてる余裕なんて無い。

「そろそろ行くわよ。準備は大丈夫?」

「大丈夫だつてば、お母さん」

鞄を手に、お母さんと車に乗ろうとした私は、早速そこで忘れ物をしたことに気がついた。

「ちよつと待つてて!」

踵を返し、リビングに戻ると、忘れ物は机の上に置いてあつた。着替えるために外していたのを忘れてたよ。それを手に取り、ゆつくりと両の腕に通し、同時に小さく、ここにいない彼に向けて呟いた。

「行つてきます、せんぱい」

アームウォーマーのものだけではない暖かさを感じながら、私は再び家を出た。

「お母さん、お待たせ」

「ええ。彼氏さんからのプレゼントは忘れずにすんだ?」

「んなつ!?

運転席に座るお母さんは、私の腕でその存在を主張するアームウォーマーを見て、にやにやしながら聞いてきた。

「ち、違うつて!せんぱいは彼氏とか、そういうんじゃ……」

「あら、違うの?」

「う……」

至極不思議そうに聞いてくるお母さんが言っていることは、まあ正しいわけで。お母さん相手に、当の私が全否定するのも何か物悲しくて。

「…………まだ」

ちよつと見栄を張っちゃった。あー、多分今顔真っ赤だ:お母さんは相変わらず、にやにやしてるし。恥ずかしいいい……

「まあ、早く乗りなさい。時間無くなっちゃうわよ」

「うー……」

釈然としないけど、時間無くなっちゃうのは事実だ。助手席に座り、学校へ車を走らせる。

「あ、お父さんはどうか分からぬいけど、比企谷君、だつけ?お母さんは大歓迎だからね?彼のこと」

「お母さん!!」

「…では先生、後はお願ひします。いろは、頑張りなさいね」

「お任せください。では行きましょう、一色さん」

「ああ、はい」

学校の応接室で簡単な説明を受けた私はお母さんと別れ、これから新たなクラスに案内されることになる。担任だという新しい女の先生はまだ若く、とても優しそうな印象を受ける。あくまで印象、とうだけだけど。

「一色さん、こんな時期に転校してきて不安だと思うけど、何かあったら言つてね。ううん、何もなくても言つてね！先生、頑張るから！」

「…ああ、はい」

先生は両手で握りこぶしを作つて、えらく張り切つている様子。
：若いつていいなあ。私が言うのも何だけど。

そんなこんなで、到着しましたクラス前。「3—B」とかかれた標識のかかるクラスの扉を開けて、まずは先生だけが入つていく。

「はーい、みんなおはよー。もう知つてる人もいるかもだけど、今日はこのクラスに転校生が来ますよー」

先生が真つ先に告げたことで、クラス内がどよめきたつ。知つてゐる生徒もいたろうしね。

「茅ヶ崎せんせー、それって女子ですかー」

「ふつふつふ。喜べ男子ども！何と、女の子なのだー！」

次の瞬間、野太い声で男子達の歓声が廊下まで聞こえてきた。ノリは良さそうだけど、何かこう…苦手な部類だなあ。

「じゃあ、一色さん。入つてきてー」

しばらくガヤガヤとした後、先生の声が聞こえる。……すー、はー
……よし。

「失礼しまーす」

努めて自然を装つて、クラスの扉を開ける。そのまま、教卓の横に立ち、クラスを一望する。

「…やべ、すげえ可愛くね？」

「俺タイプだわー」

「お人形さんみたい」

男女問わず、様々な感想が飛び交っている中で、案外私は落ちていた。まあ、対して興味が持てなかつただけかも知れないが。

緊張が無いわけではない。前の学校でのことを思い出すと、やっぱり怖い気持ちもある。それでも、変わるためにには進まないと云い。飾らずに、ありのままにいればいい。

ですよね、せんぱい。

「…はじめまして、城山中学から転校してきました一色いろはです。こんな時期の転校ですが、あまり気にしないでください。それなりに仲良くお願ひしますです」

さつと思つたことをまくし立て、お辞儀をしながら先生に視線を飛ばす。すると、先生はウインクをしながら小さく親指を立ててきた。…あのー、それやるとバレバレなんんですけど。

「はーい、じゃあみんな、それなりに仲良くしてあげてねー。それで、一色さんの席は…後ろが空いてるかな。そこで大丈夫?」

「はい、大丈夫です」

先生に軽く会釈をして、指定された席に座る。そのまま一時間目の授業が始まり、私は用意した教科書に目を落とした。

「ねえねえ、一色さんつて城山中学から来たんだよね? どんなところだったの?」

「普通でしたよ」

「一色さんって髪綺麗だよね。どうやつたらそんなに綺麗になるの？」

「特に何も……」

「ねねね、一色さん。彼氏とかつてているの!?」

「いや別に……」

一時間目終了と同時に、私の机はクラスメートに囲まれてしましました。まあ、こうなるだろとは思つてはいたし、ある意味通過儀礼みたいなものだと思うけど。ぶつちやけ面倒くさいです。のらりくらりと苦笑いと会釈でかわしていても、当然男子生徒もいるし、皆近いし、なんというかいつぱいいつぱいです。

ふえええ……せんぱあい：

「一色さん。ちょっとよろしくて？」

どうしようかと内心焦つていた時に、後ろから声をかけられた。振り替えると、薄い茶髪をロングに巻いた女子が立つていた。なんといふか、今時つて感じのテンプレ臭がぷんぷんする感じの。ていうかお嬢様的な。…あれ、せんぱいの影響受けてません？私。

「な、何？えーと……」

「都筑。つづきなづき都筑菜月ですわ」

「そ、その都筑さんが何の用です？」

ちよつと高圧的な感じを醸し出す都筑さんとやらからは、何か嫌な気配がする。それが何かは分からなければ、当の本人はどうにも私の返事が気に入らなかつたのか、こめかみに皺しわを寄せて私を睨んできた。あのー、そんな顔してると老けますよー……

「…あなた、こんな時期に転校だなんて珍しいですわね。もしかして…前の学校で何か事情でもあります？」

「…………」

ぞわつと、一瞬全身から血の気が引いた。同時に、嫌な気配の正体が分かつた。今まで散々経験してきた空氣だつていうのに、值踏みされるような目も、向けられた警戒も、今やつと気づいた。私、ここでも、牽制されてるんだ。

『あいつ、最近調子乗つてるよね』

『私可愛いですアピールうつざ』

『大場君に手え出すとか身の程を知れつての』

以前の学校で耳にこびりついた、「元」友人達の言葉がフラツシユバツクしてくる。友達ですらないのに、敵意を剥き出しにした彼女の言葉に、嘗ての恐怖が蘇つてくる。

「お、おい都筑……」

「もしかして人に言えないようなことでも…あら、すみません。邪推でしたわ」

男子が声をかけるが彼女は止まらない。都筑さんとやらは、何か言つて いるが聞こえない。

キンキンと耳鳴りがする。

手足が震える。

喉はカラカラだ。

『いろはさあ、マジ調子乗んなよ？』

『大場君に手え出すとか、少しは空氣読めつての』

『どうせその安っぽい感じで誘惑したんでしょ？』

…違う、違う…

「私、あなたのことを見つけていたんです。これからお友達になるのですから」

『それってビツチじやん』

『うつわ汚な！さいてー』

『もうあんたなんか友達じやないから』

違う！違う違う違う！私はそんなことしてない！

頭の中が、悪意で満ちていく。気分は最悪だった。手足の震えは酷くなる。喉はカラカラどころかこびりついたように気持ち悪い。胃が締め付けられるように苦しくて、中のものが逆流しそうになる。

私は悪くない。耳を塞ぎたい。大声で叫びたい。けど、永遠のように延びていくこの時間が与えてくるのは、抗いようのない苦しみだけ。

結局友達だなんだと言つても、そう思つてたのは私だけ。結局、私

は何一つ変わつていなかつた。変われていなかつた。赤の他人の言葉で、私の決意など簡単に揺らいでいる……はは、せんぱいのこと散々言つてきたけど、もう笑えないや……

変わると意気込んでみても、現実は何も変わらない。
やつぱり、私は、弱いままだ。

『俺は、『本物』が欲しい』

『私が、せんぱいの本物になつてあげますよ』

(……)

脳裏に浮かんだのは、いつかの記憶。決意したはずの、最愛の人との、約束の記憶。

「……だけ？」

「え？」

「用件は、それだけですか？都筑さん」

……なぜ、ほんの少しでも忘れていたのだろう。私がやるべきことなんて、ここに来る前から決まっていたのに。まだ、気持ち悪さは拭えないけれど。声は悲しいくらいに震えているけれど。

もう、手の震えは止まつていた。

「気になるのは分かりますけど、あんまり余計なことを詮索する人は嫌われますよ？」

「……なつ！」

「皆さんも、出来ればあまり事情は聞かないでもらえたら助かるんですけど。はつきり言つて、疲れます」

精一杯の虚勢で都筑さんに返すと同時に、今だに机を取り囲んでいるクラスメート達にも同意を求める。かなりきつい返しをしたからか、私達の間の異様な雰囲気を感じたからか、皆、まばらに返事をしきこちない感じでそれぞれの席に戻つていく。

「都筑さんも、まだ何か？」

「つ……いいえ」

牽制に失敗したからか、悔しそうに私を睨んでくる都筑さんを端に、私は自分の席を立つてクラスを出た。もう限界、少し喉を潤したかった。

「……あ」

予鈴がなつた。

「た、ただいま……」

「おかえり……ち、ちょっといろいろは、大丈夫?」

「うん……へーきへーき」

放課後。お母さんが迎えに来た車に半ば倒れ込むように乗り込む。お母さんが言うように、今の私の顔色はそれなりに悪いのかもしない。

あの休み時間の後、放課後まで誰も声をかけてくることはなかつた。都筑さんはずっと睨んできてたけど、結構トーン低めで言い返したし、異様な雰囲気の中で私に話しかけようとする人もいなかつた。まあ、転校初日にあの空気になつちゃつたら、もう普通には過ごせないだろう。よくて孤立、下手をすれば、前の学校の繰り返し……

「……」

「いろは?」

何だろう、それはすぐ嫌なはずなのに、とても怖いはずなのに、私の心は曇らない。あの時の震えや動悸が嘘のように、今の私は落ち着

いている。

(…あの時、言い返せたからかな……?)

他人から見れば笑ってしまうような小さな一步。でも、私の中では限りなく大きな一步。前に進むための一歩。

これから起ころうであろう困難や苦難でさえ、何とかなると思える。以前の私では考えられなかつたことだ。

それは、つまり。

(変われてるつてことなのかな、せんぱい……)

あの日、せんぱいが変わると、変わりたいと言つてくれたように。あの日、私も変わりたいとせんぱいに言つたように。

私は、あの頃の空虚な私から、少しずつ変わっているのかもしだい。

(せんぱいに言つたら、誉めてくれるかな……)

だとしたら、これほど嬉しいことはない。自然と体に力が入り、顔の熱さが増していく。

「ちよつといろは……大丈夫……?」

お母さんが何か言つてるけど、それすら氣にする余裕がない。

せんぱいの声が聞きたい。

せんぱいに誉めて欲しい。

せんぱいに会いたい。

でも、まだダメ。まだまだ私は弱いから。まだまだ私は小さいから。あの人隣に並べるようになるまでは。

(ここからなんだ。頑張らないと)

まだ、頑張らないと。人は急になんて変われない。それでも、人はゆっくりでも変わることはできる。ゆっくりでも、私は変わるんだ。

(見ててください、せんぱい)

私、頑張りますから。腕をそつと抱き締めるようにして、改めて決意を固くする。

嫌な思いもした最悪なスタートを切つた初日だつたけど、こんな風に思えたのなら。

まあ、リスタートした中学生活も、中々悪くないのかもしれない。

……あ、でもやっぱり声くらいは聞きたいです。せんぱい。

第十話 騒がしい彼女との時間も、まあ悪くない。

「はふう……」

全身を暖めてくれる湯船に体を沈めると、思わず声が漏れた。一日の疲れを溜め込んだ体の隅々まで、暖かさが広がっていくみたい。

初日の学校は、まあ色々大変だつた。転校生特有の通過儀礼を受け、クラスの女子から牽制され、トラウマがフラバしかけ。（でも……）

ぶつちやけ凄く苦しかつたし、泣きたくもなつた。逃げたくもなつた。それでも、負けずに言い返せた。多分……ううん、あれはせんぱいのおかげ。

「変わりたいって、思っちゃったんだもん……」

ひねくれててちょーキモい時もあるけど、根は純粹で、恥ずかしがりやで、すづごく優しいせんぱい。なのに、他人を優先して自分を蔑ろにしちゃうせんぱい。真っ先に傷ついちゃうせんぱい。そんなせんぱいの背中に、追い付きたくなつた。並びたくなつた。

……支えてあげたくなつた。

（これって、母性……って、やつなのかな）

せんぱいのことは好き。だからこそ追い付きたいって気持ちもあるし、同じ所を歩きたいっていうのもある。でも、自分を傷つけるせんぱいを見て、どうしようもなく悲しくなる私が、守つてあげたいと思う私がいる。

（……何か、考えてたらすつごい恥ずかしくなつてきた……）

多分お風呂の熱気だけが原因ではない顔の火照りを隠すかのように、顔を湯船に沈めていく。沈んだ口元から、息が気泡となつてぶくぶくと音をたてる。

（の、のぼせる前にでぢやお…）

これ以上せんぱいのことを考えると本当にのぼせてしまいそう（二重の意味で）なので、ざばつと音をたててお風呂場を後にした。

お風呂場の鏡に映つた私の顔は、やっぱり赤く火照つていた。

「じゃあお母さん、行つてきます」

「ええ。…無理はしちゃダメよ」

「分かってる」

翌日。学校の近くまで送つてもらつた私は、自分の通うクラスへと向かう。

「……」

クラスの扉を開けると、昨日とはうつて変わり、クラス中に静寂が広がつた。さつきまでは騒がしかつたのに。まあ、転校初日でみんな態度をとれば、どうなるかぐらい分かつてはいたけど。

（前途多難つて感じかなあ……）

そんなことを考えながら、自分の席に着く。…何か塗られてないか確認してしまつた。前にあつたから。

とにもかくにも、やつちやつたものは仕方ない。気持ちは切り換えられたし、もう大丈夫。別に一人でもやつていけるし……はつ！（こ、これがいわゆる「ぼつち」というやつでは……）

しまつた…まさか、あんなに馬鹿にしてたせんぱいのぼつち体験を、まさか自分がすることになるとは。

…でも、せんぱいと一緒に、か。

「…えへ」

『…ど、どうしたんだろ、一色さん。急に笑いだして』

『何かあつたのかな…』

『変わった人だよな……』

や、やばい。みんなの前で弛むのはマズイ。ぼつちだけならいざ知らず、このままだと変態扱いされてしまう。なるべく、自然に表情を作る。自然に…自然に…

『一色』

ゴンツ！

『!?

駄目だ――――！無理、絶対無理！一回考えちゃつたら緩みまくつてせんぱいしか出てこない！私ヤバイ！うん、知ってる！あー、思いつきり机にぶつけたから皆ビックリしてるだろうなー変人決定かなー…あ、おでこ痛くなってきた。

もういいや、このまま授業まで寝たふりしどう…

「初めまして、だよね？」

一時間目終了後。何故か、私は一人の女生徒から声をかけられていた。椅子に座つたままなのを見るに、どうも隣の席の女子みたい。ふわふわした感じの雰囲気に薄い綺麗な茶髪、それに激しく自己主張していく二つのそれ。ザ・美少女って感じの子。で、デカイ…せんぱいも、大きい方が好きなのかな。
……何か嫌だ。

それは置いといて、正直意外だつた。転校生があんな態度をとつて、わざわざ声をかけられるとは思つていなかつたし。周りもざわざ

わしてゐるし。見た感じ、悪意があるわけでもなさそうだし、この人の
考えが読みづらい。……警戒はしてるけど。

「あ、ごめんね。まずは自己紹介だつて。あたし、金沢佐和子。かなざわさわこあなた
は？」

「……応、昨日自己紹介はしたんですが」

あんなことがあつたから、クラスメイトの把握までは流石にできて
ない。というか、今はあんまり他人と関わりたくない。

「あー、あなたが転校生！ごめんね、あたし昨日休んでたんだよー。ご
はん食べ過ぎてお腹痛くなっちゃってさあー」

あつははーと目の前で笑う彼女の様子に、何というか脱力する。警
戒するだけ無駄、みたいな。

少し気は緩んだけど、結局私の対応は変わらない。

「……色いろはです。金沢さん、あんまり私に関わらない方がいいで
すよ」

「え？」

それは二重の意味での警告。一つは、私と一緒にいることで彼女が
悪意に晒されることがないように。

もう一つは……

「あれ、どこ行くの？」

「どこでもいいじゃないですか」

只今深刻なせんぱい不足によつて頭の中がせんぱい一色な私の、緩
んだ顔が見られないようだ。

甘かつた。

「ねね、一色さん」

「…」

三時間目。

「一色さん、ちょっとノート見せてくれない？よく見えなくつてさー」「…」

「こら金沢！私語をするな！」

「つだあ!?」

四時間目終了後。

「一色さー」

「…」

「逃げた!?」

お昼休み。

「一色さん、一緒にごはん食べよー」「…」

「黙々と食べ続ける!?しかも早つ！」

午後の体育。

「一色さーん、一緒に組もうよー！」「…」

これは正直助かつたけど。

「一色さーん」

「一色さん？」

「一色さーん、どーー?」

…………何だろう、この状況は。何で私は、放課後になつてまで、同

姓のクラスメイトから逃げているんだろう。というか、はあ、金沢、^{あのこ}はあ、しつこすぎ……はあ、もー駄目、息切れ……

「あー、一色さんここにいた」

「……うげえ」

壁を背に座り込んでいる私の元に、もう何度目か分からぬいあのこ……もうこいつでいいか。こいつが現れた。もはや無関心を貫くのも疲れるので、あからさまに嫌そうな声を出した。

「ちよ、うげえはないんじやないの？ 酷くない？」

「そう思うなら少しくらい休ませて……」

「逃げなきゃ疲れないよ？」

「遠回しに来んなつづったんですねよ……」

もう放課後、周りに人目がないからか、私の素が露骨に出始めた。……もう猫被るのにも飽きた。ていうか疲れた。

「……それが一色さんの素つてわけ？」

「何か文句ありますか……」

あー気取らないって楽ー……引くかな？ 引くよね？ もう噂とかどうでもいい。なんでも来いですよ。あ、いじめだけは勘弁。というか本当、帰つて……

「……ふふつ」

「何笑つてんですか……」

こいつは引くどころか、何故か笑つていた。

「いや、やつぱりだつて思つて」「やつぱり……？」

「私ね、初めて会つたはずの人を見ると何となくわかつちゃうんだー。その人がいい人かどうか」

いい人かどうか分かる。そう話すこいつは、楽しげな様子で話を続ける。

「朝、クラスに来てみたら知らない生徒がいて、みんな遠巻きにあなたを見てて、でも誰も話しかけない。ちよつと気になつたんだー、あの時。でね、声かけた時にね、分かつたんだ。あ、この人いい人だつて。で、友達になりたいなーって思ったの」

「友達……」

楽しそうに話すこいつは・彼女は、すぐ純粋でまっすぐな目をしていた。

いつかの私みたいな目をしていた。

「それで、こうやって話をしてみて、素のあなたと話してみて、やっぱり間違つてなかつたつて思えた。だからさ、私はあなたと友達になりたい。：私、これでも人を見る目には定評があるんだよ？一色さん私のとなりに座り、じいつと私を覗きこむ彼女。私の素を見ても引くことなく、むしろ彼女の使う「友達」に、昨日のような感覚は起こらなかつた。

それでも。

「駄目」

やつぱり、心は受け入れてくれない。彼女は違うんじゃないか、信じてみてもいいんじゃないかと揺れる頭とは裏腹に、心は、冷酷に、冷静に「友達」を受け入れてはくれない。

「別にあんたが嫌いとか、そういうんじゃない。けど、無理なの。私は友達絡みで前の学校で色々あつて、すつぐく悩んで、疲れて、傷ついて……」

なのになんてだろう。私の口からは、私の心の中に押し込めていた痛い記憶が、思いが言葉になつて溢れていく。私の弱さが、傷痕が、溢れ出していく。

「あんたはいい人だと思う。多分、信じていいと思つてる。友達になりたいとも思つてる……と思う。……でも無理。やつぱり怖い、また裏切られたら、また傷ついたら、今度こそどうなるか分からぬから。だから……ごめん」

話すつもりなどなかつたのに、ずっと閉じ込めておくつもりだったのに、私の口は、思いを吐き出すことを止めてはくれない。

やつぱり、思つた以上に、心はそう簡単には変われそうにない。

「…そつか」

静かに、彼女の声がした。流石に諦めてくれるだろう。私は変わりたい。変わりたいけど、今の私にはまだ――

「じゃあやつぱり諦められないなー」

「へ……」

「確かに私はさ、一色さんが前の学校で何があつたかは知らないし、分からない。でも、一色さんは友達が『嫌い』なんじやなくて、『恐い』んでしょ？それってさ、私の努力次第でどうとでもできる気がするし！あ、嫌がることはしないよ？絶対！」

立ち上がり、手をぐつと握つて力説する姿は、確かに私への信頼を感じる。

「……どうして、あんたはそこまで私と友達になりたいわけ？」

「へ？」

「はつきりいつて私性格悪いし、あんたは知らないだろうけど、昨日クラスでやらかしてるから、私に関わつてると白い目で見られるかもよ？それでも、あんたは私に固執するわけ？」

だからこそ、気になる。なぜ、彼女がここまで私に固執するのか。単に珍しい転校生だからにしては明らかに度が過ぎてていると思う。彼女は手を頸に添えてうーん、と悩み、再び私の隣に腰を下ろした。「多分、眩しいからかな、一色さんが」

「…………！」

『……多分、眩しいんだ、一色が』

思い出すのは嘗ての記憶。大切な人の、大事な言葉。

「何て言うか、私も随分変わつてるつて言われるからさ。こう見えても意外と色々誤魔化しながら生きてるんだ。でも、そんな私には自分つてものを真っ直ぐ持つてるあなたが眩しく見える。だから、あなたと仲良くなりたい。……こういう理由じゃ駄目かな？」

そう言つて覗き込んでくる彼女の顔を見て、漸く理解した。私は変わろうとしていたんじゃない。ただ、拒絶していただけだつたんだつて。逃げていただけだつたんだつて。

そう理解したら、途端に。

「……ばつかみたい、私」

変わるとかなんとか言つてた自分が途端に恥ずかしくなってきて。

「…いろは」

「え？」

「名前。友達になるんだつたら、下の名前で呼んでみてもいいんじゃ
ない？…金沢さん」

「……！ そうだよね、いろはちゃん！」

彼女の…金沢さんの屈託のない笑顔は、見ているこつちが恥ずかし
くなるほどで。

「じゃあ帰る。また明日、金沢さん」

「えー、一緒に帰ろうよーいろはちゃん！」

傷ついたら、裏切られたら。せんぱいに並び立つためにはそんなも
のを怖がってる暇なんてない。だから、まずは「友達」を信じてみる
ことから始めてみようと思う。人の心にしつけずけと入り込んでくる、
どこかあの人に似ている彼女を。

まーその、あれです。

「私のことも名前で呼んでいいからね、いろはちゃん！」

「絶対嫌です」

「ええっ！」

この学校で初めてできた騒がしい彼女ともだちとの時間も、まあ悪くない、
かな。

第十一話 アツトホームな我が家にて、先輩と後輩は再び邂逅する。

金曜某日。今日も今日とて、ぼつち街道爆進中の学校を終えて憩いの場所—即ち、我が家へと帰ってきた。

「お帰り、お兄ちゃん！」

玄関先でマイエンジエル、コマチエルこと小町が出迎えてくれる。それはいい。愛しの我が家に帰ってきたのだと実感できるから。しかし、だ。

「……お、お邪魔します」

そここの壁の向こうからこっちを見ている君、何でここにいるの。

「……なぜお前がいる、一色」

病院以来の一色いろはが、うちにいた。

「——それでね、学校でいろはさんと会って、小町すーっ（ぐ）ビツクリしたんだから！」

「そうかそうか」

小町からの話を纏めると、つまりはこういうことだ。

一色はあるいじめ問題の件で転校をした（それは俺も知っている）。が、転校先がたまたま小町の通う光梁中学だつたと。そこで偶然鉢

合わせしてビッククリ！せつかくだから連れ帰ってきた！と……一色は捨て猫感覚でお持ち帰りできるのか。

「で、気になつてたんだけど。そこの君は誰だ？」

「あ、ご挨拶遅れました！私、金沢佐和子と申します！」

さつきはいなかつた少女、一色の友達だと言つた金沢という少女は、さも当然とばかりに一色に絡んでいる。多少鬱陶しそうにしているものの、当の一色も嫌がる感じは見られない。

「これでもいろはちゃんの友達やらせてもらつてます！」

ふんす、と胸を張つてドヤ顔の金沢さん。おお、中々見所のある……じやなくて。

「そうか……一色、友達できただな」

「え、ええまあ。……この子なら、信じてみてもいいかなつて思えたんで」

小声での会話に、顔を赤く染めつつも答える一色には、あの時のように弱さや脆さは見えなくて。

…本当に強いよ、お前は。

「ふむ？ふむふむ……ピコーン！」

ちよつと小町ちゃん？何、そのピコーンて。怪しさ満点なんだけど。

「お兄ちゃん！小町は今日の晩御飯の材料が足りないことを思い出したのです！」

「は？マジかよ。なら俺が買つてー」

「その気遣いは小町的にポイント高いけど、今はダメダメだよお兄ちゃん！お兄ちゃんにはお客様をもてなす義務があるのです！」

何か、普段の頭の足りない残念な小町のイメージを払拭するかの如く捲し立てている。それでも残念さが隠しきれていないところがお兄ちゃん悲しいが。

「てなわけで、お兄ちゃんはしつかりといろはさんをもてなすこと！で、金沢さん。ちよつとついてきてもらつてもいいですか？」

「え？……なるほど、お任せだよ小町ちゃん！」

「え？ちょ」

「じゃあいろはさん、小町達は出掛けてくるのでごゆっくり！うちのゴミいちやん使ってていいので！」

「じゃあいろはちゃん、また後でねー」

「待て小町——」

怒濤のラツシユを放った後、小町と金沢という子は共に買い物に行ってしまった。仕方なく一色の方を向くと、妙に落ち着かない様子の一色と目があつた。

「……ど、どうも」

「……とりあえず、茶でも出すわ」

二人残されて縮こまつてビクビクしている一色にも何やらそそるものがあるが、とりあえずもてなしとやらをしてみよう。つうか小町ちゃん、客だというのならまず君がお茶くらい出しなさい。

「い、いえ！ お構い無く！」

「そう言うわけにもいかん。小町にしつかりもてなせと言われたからな。兄として聞かないわけにはいかない」

「……相変わらずのシスコンですね、せんぱい」

「千葉の兄妹なんてどこもそんなもんだ」

「せんぱいだけですよそんなの。まあ、そういうところがいいんですけど」

「ようやくいつものお前に戻ったな。……ほい、お茶」

話しているうちに解れてきたのが、ようやくいつもの調子に戻った一色に茶を渡し、少し離れたソファの端に座る。自分用に持ち出したマツ缶を開け、口の中でその暴力的な甘さを堪能する。

「せんぱい、またそれですか」

「いいだろ、旨いんだから」

千葉の人間たるもの、マツ缶はソウルドリンクである。意見は認めが異論は認めない。ことじとく却下してやる。

「……せんぱい、それ、少しください」

一人謎の達成感を噛み締めていると、一色がそんなことを宣つてきた。

「は？ いや、欲しいなら新しいやつを——」

「そんなの勿体無いですよ。とにかく、それもらいますね」

「あ、おまつ」

どこで会得したのかと問い合わせたくなるほどの早業で、俺のマツ缶は一色に強奪されていた。そして、それをおもむろにあおると――

「ぶふっ!?」

盛大に吹き出した。

「どこほつえほつ！な、何ですか、この甘さ！甘つ！ひたすらに甘つ！」

「それがMAXコーヒー、通称マツ缶だ。その暴力的なまでの甘さが癖になるんだろうが」

「ど、どこがですか……」

恨みつたらしくマツ缶を見つめる一色は、しかしマツ缶を飲むことは止めない。何故なのか。

「つうか、今気づいたが――

「お前、間接キスとか気にしないのな」

「ぶふあっ!?」

またも盛大に吹き出した。ああ、勿体無い。

「にしても遅せえな、小町達」

「本當ですねー」

あれから真っ赤になつた一色を宥めたりマツ缶の後処理をしたりと色々あつたが、ようやく落ち着いた今は二人してソファでまつたり

と過ごしていた。時間は六時過ぎ。小町達が出ていったからそろそろ一時間が経つ。まあ、華の中学生二人が出掛ければ、何かと時間がかかるものなのだろう。俺にはてんで分からんが。話題が無いのも寂しいので、軽く話題を振つてみる。

「そういうや、ちゃんと使つてくれてんのな、それ」

さつきふと気づいたが、一色の腕にはあの日——退院の日に俺が渡したアームウォーマーがその存在を主張していた。シンプルな学生服と相まって、ストライプ柄がよく見える。やはり一色の着こなしと、そして俺のセンスが決して悪くないことを再認識する。「勿論ですよ。せんぱいがくれた大切なものですし」「はいはい、あざといあざとい」

「むー」

当たり前のようなやり取りだが、どこか妙に懐かしく、どこか楽しんでいる俺がいる。小町以外との関わりなどいらないとさえ思つてた俺が、一色との時間は嫌いでなく、むしろ楽しいとさえ感じている。つまりそれは、そういうことで。

…それでも、俺の心は答えを出せないでいる。

「……」

「せんぱい？どうしたんですか、難しい顔して」

「え？…そんな顔してたか、俺」

「ですです。ただでさえ濁つた目がもつと淀んでましたよ」

「おい」

容赦のない物言いは、心にグサツとくる。まあ、俺自身分かつてるからいいけどね。ハチマンナイテナイ。ホントダヨ？

「でもまあ、そういう顔もかつこいい、です、けど……」

「照れるなら言わなきやいいんじゃないですかねえ……」

ぼそぼそと呟きながら顔をクツショーンに埋める一色。ちょ、一色さんそれ俺のクツショーン。やめて！使えなくなるからやめて！いろんな意味で！

「せんぱいが悪いんじゃないですか！」

「なぜ俺がデイスられなけりやならんのだ」

「かつこいいのが悪いんです！」

「そんなバカな」

何という理不尽な怒り。誉められてるのかけなされてるのかわからん。

「もー、ちょっとは強くなるまでせんぱいに会うのはお預けだつたのにー…結局小町ちゃんに乗せられて来ちゃつたし。私のバカ」

「…何言つてんだよ」

何が強くなるまで、だ。お前はもう十分強くなつてる。とっくに変わってるさ。…なんて、言つたところで一色は納得しないだろう。だから。

「ふあつ!!」

少し乱暴に、一色の頭を撫でる。セットされているであろうさらさらの髪が気持ちいい。

「あの日に言つただろ、会いたくなつたらいつでも来いつて。小町も喜ぶし、それに…」

「そ、それに?」

「……お、俺も、少しは楽しいし、な」

…言つて恥ずかしくなつてきた。何を言つているんだ比企谷八幡、お前はそんなキヤラじやないだろ。もつと卑屈になれよ！（錯乱）

「せんぱいがデレた……」

「う、うつせ」

「デレ幡せんぱい……」

「やめてください」

それ以上は死んじやう、主に俺のクリスタルハートが。このままでは俺の黒歴史が増えてしまう。助けて猫型ロボット！

「たつだいまー」

「お邪魔しますー」

救世主は猫型ロボットではなく天使でした。おお、あなたが神か。いいえ、天使です。

「あ、小町ちゃんお帰りー。聞いてよ、さつきせんぱいがねー」

「さあ小町、材料を寄越せ！今日はお兄ちゃんが何でも作つてやるぞ

！あー腕がなるなー！」

鮮やかなパスカットを挟み、小町から袋を奪い去り、台所に籠る。これ以上黒歴史が小町に知られたら本格的に死んじゃう、主に俺のガラスハートが！（降格）

「どしたのお兄ちゃん…？ま、いいや。それよりいろはさん、もう夜も遅いですし、うちでご飯食べていってくださいよ！」

え、何言つてんの小町ちゃん？

「え、でも家にお母さん達いるし——」

「そう言うと思つて、既に連絡しておきました！『娘をお願いします』つて小町頼まれちゃつた！」

「な、何という手回しの速さ…」

「私もお呼ばれしてるから、一緒に食べよういろはちゃん！」

「てな訳でお兄ちゃん！晩ごはん一人分追加で！」

どうやら一色が食べていくのは決定らしい。つか金沢さんとやらも食べてくのかよ、材料が持つか…？

「…あいよ、すぐ作るから待つてろ」

しかしあま、そこは可愛いマイシスターの頼み。千葉の兄としてはそれに答えなければなるまい。

久々に、腕を振るいますか。

「お、美味しい…」

「でしょでしょ！お兄ちゃんのカレーは絶品なんですよ。久々に食べたけど

「普段作らないからな」

調理開始から數十分。食卓に並べられた今日の晩飯、カレーを四人で囲つてている。出来映えは上々、専業主夫目標は伊達じやない。基本的に社畜根性の両親は遅くまで仕事に行つていて帰つてこない。普段から晩飯は俺と小町の二人分で済むため、カレーは逆に効率が悪いのだ。たくさん作ると処理に困るし。なので、カレーを作ったのはかなり久々だつたりする。

「美味しいです。女として負けた気分です」

「大袈裟だろ」

金沢さんとやらにも気に入つてもらえたようだ。良かつた良かつた。それでこそ作った甲斐があるというものだ。

「今度料理教えてくださいよ、比企谷先輩」

「おう、気が向いたらな」

金沢さんとやらは随分と気に入つたようだ。まあ、自分の作つたものを見習われるのは悪い気はしない。機会があれば教えるとしよう。

機会があれば。

「むー……」

しかし、どうやら一色は機嫌が悪くなつてゐるらしい。明らかに「不機嫌！」といつた唸り声をあげている。

「…お前にも今度教えてやるよ」

機会があればだが。

「……じゃあ、許してあげます」

何故に上から目線。俺は許しを乞う立場だったのか！

ともかく、一色の機嫌を損ねることもなく、のんびりとした空気のまま、全員が食事を終えた。

「…さて、そろそろ遅くなるしお前ら帰れ。送つていつてやるから」

「「え？」」「

「え？」

至極当然で真っ当な提案をしたはずなのに、俺に向けられる三つの「こいつ何言つてんの？」的な視線。あれ？俺間違つてないよね？

「いろはさん達、泊まつていかないの？」

「いやいや、流石にまずいだろ」

当然小町の部屋で寝てもらうにしても、仮にも年頃の男子がいる家に娘を泊まらせる親なんて……

「許可は取つてありますよ？せんぱい。『比企谷君なら大丈夫！』って言つてました」

「マジですか」

いたよ、今日の前に。大丈夫なんですか一色のお母さん。あなたの

俺に対するその絶対的信頼は何なの…

「お父さんからも了解は得てます。…何か電話越しに泣いてましたけど」

おいそれめつちや嫌がつてんじやん。苦渋の決断じやん。汲み取つてやれよ、父親の気持ち。一色家は女の方が強い家庭なの?そんな家そうそうあるわけ…あ、うちがそうでした。

「まあそういうことだから、諦めてね。お兄ちゃん」

「……どうなつても知らんぞ」

「比企谷先輩!私も許可とつたんでお世話になります!」

ああうん、知つてた。

「疲れた……」

あれから風呂に入り、テレビを見たり、ゲームをしたり、俺がディスられたり、集まつて課題をやつたり、俺の黒歴史が晒されたり…：まあ色々あつた。：何故か俺がダメージ受けているのはこの際捨て置こう。結論として、とにかく疲れた。女子中学生とはここまでエネルギッシュなものなのか、それとも俺が脆弱なのか。前者だと思ったい。こんなことを常日頃から経験しているであろうリア充達には心底感心する。あいつら凄…訂正、やつぱあいつら爆発しろ。

全身に久しく感じる疲れのまま、自分のベッドに頭から突っ込む。全身を包む布団の弾力と温もりが心地よい。

「このまま寝ちまおう…」

ちらりと時計に目を向けると、短針は十一を過ぎていた。道理で眼
たくなつてくるわけだ。今日は心底疲れたから、余計に。

コンコン。

そのまま微睡まどろみに身を委ねようとしたところ、誰かが俺の部屋の扉
をノックしてきた。小町かとも思ったが、今さら小町がノックなどす
るとは思えない。ノック無しで扉を開けてきて、気まずい場面に直面
したことなど思い出したくもない。何をしていたかはご想像にお任
せする。

「…せんぱい、まだ起きますか？」

やはりというか、ノックの主は一色だつた。普段のあざとボイスか
らは想像もつかない控えめな声からして、変に遠慮しているんだろう
か。…男の家まで来といて、今更何を遠慮しているんだか。

「…起きてるぞ」

だから、俺は眠たい意識を呼び起こし、一色を迎える。

「何か用があるんだろ。…入つてこいよ」

「…で、では。お邪魔しみやつ!?」

あ、囁んだ。

「…いい加減機嫌直せよ」

「…不覚です」

ベッドに腰掛け、リビングにあつた俺のクッションに顔を埋めた一
色を宥めることはや五分。漸く口を利いてくれるようになつた。そ
んなに囁んだことが嫌だったのか…

「…お前、そのクツシヨン気に入つたの？」

「…はい」

いよいよそのクツシヨン使えなくなつたんだけど。もういいや、そ

のクツシヨン一色にやろうそうしよう。

「…それよりも、わざわざ部屋まで來たんだから何か用があつたんだろ。何だつたんだよ」

本題に突つ込むと、クツシヨンから少しだけ顔を出した一色がぼそりと呟いた。

「…別に用事があつた訳じやないです。ただ、せんぱいと話したかつたつていうか…」

「…そうか」

ただ話したかつただけ…そんな事を言われたのは、多分生まれて初めてだろう。この見た目と性格のせいでガキの頃から氣味悪がられていた俺は、用事があつてさえ話すのを拒否されることも多かつた。家族からでさえ、そんな事を言われた覚えはない。だからこそ、今心がざわざわしているのは慣れていないからだ。他者から向けられる、純粹な「好意」に。

「…ま、夜も遅いし、少しだけな」

だから、一色ともつと話したいと思つてしまつたのは仕方のないことだし、俺にとつて良いことなんだろう。

「…つーはいつ…」

「こんなことで喜ぶなよ…」

はにかみながら、一色は屈託の無い笑顔を浮かべる。

「お前は、上手くいってるみたいだな」

今日の一色の表情に、あの頃のような悲しみは見られなかつた。友達だと言う連れもできていた。全てを拒絶しかねなかつたこいつが拒絶しなかつたということは、つまりそういうことなんだろう。

「まあ…面倒くさいですけど、嫌いになれない感じです。せんぱいはどうなんですか?」

「予定通り、ボッヂ街道を快走中だ」

「うわ……」

「やめて。露骨にガチのテンションで引くのやめて」

質問に答えただけなのに何故ドン引きされねばならないのか。俺が悪いの？うん、知つてる。

「…元々事故がなくたって俺はボツチだつたよ。その結果が一ヶ月遅いか早いかだけの問題だ。何も問題はない」

人はそう簡単には変われない。この事故で一番学んだことだ。俺は卑屈で、独善的で、目が腐つてて。それを全部含めて比企谷八幡だ。よくある高校デビューとかいうやつも、仮初めの仮面を被つただけで本質が変わる訳じやない。だからここまで予定調和、むしろ運命とすら言えるかもしれない。

「…本当にそうだとしたら、せんぱいが事故してくれて良かつたかもしきません」

「あん？」

え、ここに来て急にディスられたよ。もしかして一色に好かれてるかもとか、また勘違いだつたりするの？だとしたら、新たな黒歴史に悶えてしまわなければならない。

「だつて、そのお陰でせんぱいと会えたんですから」

「…」

「…よくそんな台詞、恥ずかしげもなく言えるな」

「は、恥ずかしいに決まってるじゃないですかっ」

なら言わなければいいんじゃないですかねえ…現に、さつきよりも強くクツションに顔を埋めたので、嘘ということも無さそうだ。

「恥ずかしいですけど、せんぱいはこういうのになれてないとthoughtので…私だけでも、ちゃんとこうやって、素直に言葉にするんですけど」多分顔を真っ赤にしながら言つているのであろう、一色の言葉。クツションに顔を埋めてるので声がくぐもっているが、その甲高い声がはつきりと俺の耳に響いてくる。

「……ありがとよ」

嘗ての俺なら、裏を読み、真意を探り、そして突っぱねていたはずだ。安易な好意に飛び付いて、何度も痛い目を見てきたから。しか

し、一色の言葉には裏がない。俺がそう信じたいだけかも知れんが、信じたいと思えるだけでも、今まで関わった他のやつらとは違つていた。

だから、俺も素直に礼儀で返す。そこに、嘗てののような歪みはなかつた。

「素直なせんぱいってちょっと新鮮です」

「キモいか？」

「かっこいいです」

「……さいですか」

照れ臭くなつて頬を搔く。キモい照れ隠しだろう？理解している。

隣で一色はニヤニヤしているが。

「…そろそろ遅いし、小町の部屋行つて寝る。いくら休日でも夜更かしは色々と面倒だぞ」

時間は短針が二を回つたところだ。夜更かしは美貌の敵？的なことを小町が言つていたし、頃合いだ。一色も俺もそろそろ寝た方がいいだろう。

「夜型のせんぱいとは思えない発言ですね」

「いつから俺が夜型だと錯覚していた？」

まあ夜型で合つてますけどね。ぶつちやけこの雰囲気がこつ恥ずかしいだけですけどね。

「まあいいです。流石にそろそろ眠なくなつてきましたし、名残惜しいんですけどおいとまします。名残惜しいですけど」

何で二回言つたの？あれか？大事なことだから二回言つたの？そんなに名残惜しいなんて、やだまさか俺に惚れ…てる訳無……いことも無かつたわ。

「ではせんぱい、また明日です」

「…ん、また明日な」

一色らしいあざとウインクを決め、部屋の扉が静かに閉じられる。

泊まつている以上、明日も一色と顔を合わせることになるのだろう。今までの俺では到底あり得なかつた、非現実的なようで、紛れもない現実。変化を嫌う俺が、しかし嫌いではないこの日常をどこか心

地よく感じているのは、やつぱり。

「…寝るか」

生まれかけた黒歴史の欠片を脳の奥底に追いやり、のそのそと自分のベッドに潜り込み、その意識を沈めていく。

今日はいい夢でも見れそうだ、何てことを考えながら。

「……」

意識の傍らで聞こえた音は、幻聴だろうとぼんやりと答えを出した。

「……」

……で。

「…何故だ」

「…すう」

目が覚めると、一色がいた。何でこいつはここにいるのん？小町の部屋からここまで寝ぼけてきたのか？寝相がどうとか言うレベルじゃねえ。

軽く頭を振り、思考を働かせる。とにかく、この状況を見られると困る。ヤバいじやなく、困る。何故つて？面倒くさいことになるからさーとにかく、早く一色をどかして――

「おつはよーお兄ちゃん！ねーいろはさんがどこにいるか知らな

……」

「おはようございます比企谷せんぱ…わあお」

はい、ゲームオーバー。八幡は目の前が真っ暗になつた。むしろ白目。

「…えー、と」

流石に言葉に迷う小町は俺と一色を交互に見た後、小首を傾げてこう言つた。

「昨夜はお楽しみでしたね？」

「おいバカやめろ」

それは洒落にならん。いやマジで。

「待て小町、話を聞け」

「…お兄ちゃん、さすがの小町でも兄の情事は聞きたくないよ」

「違う」

「比企谷先輩つて意外と狼だつたんですね」

「違う！」

待つて、やめて。このままだと俺、死ぬ。男としても、兄としても、社会的に。頼みは一色だけなんだが――

「…ん――」

一色を見ると、モゾモゾと動きつつ、その体を起こす。目がとろんとしててエロ――艶かしい。じゃなくて！

「起きたか一色。頼む、この状況を説明してくれ。でなきや俺が死ぬ、色んな方面で」

「いろはさん！うちの『みいちゃんはどうでした？』

「…んえー？」

小町余計なことを聞くな！後一色、あざとい。寝起きでもあざといとか本当…あ、これ寝ぼけてるだけだ。

「昨夜はあー…せんぱいとお話ししてえ…その後……」

とろーんとした声で昨日のことを思い出しているだろう一色は、突然にへらと顔を崩すと。

「…固かつたですう」

…爆弾を投下した。

「…胸板が」

そつちを先に言つてええエエエエ！勿論俺の魂の叫びなど分かる

はずもなく、予想通り一色の後半の言葉など小町達には聞こえるはずもなく。飛び交う黄色い声とそれを訂正しに奔走する声だけが、比企谷家の土曜の朝に響いていた。

「…むにや。えへへえ、せんぱい……」

力尽きたように眠りに落ちた一色の幸せそうな顔だけが、やけに印象に残つた。